

「学生が変える日本大学」

—「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」に関する報告書—

土屋怜王^{1), 2)}, 田中花奈^{1), 3)}, 中澤駿之介^{1), 4)}, 宮川美月^{1), 5)}, 大保航貴^{1), 6)}, 境野哲美^{1), 7)}
本橋侑也^{1), 8)}, 渡 祐太^{1), 9)}, 柴田大輝^{1), 10)}, 曾山はるか^{1), 11)}, 宮口昌也^{1), 12)}, 垂見麻衣^{1), 13)}

¹⁾「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」コアスタッフ,

²⁾日本大学経済学部経済学科3年, ³⁾日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科2年,

⁴⁾日本大学危機管理学部危機管理学科4年, ⁵⁾日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科4年,

⁶⁾日本大学理工学部交通システム工学科3年, ⁷⁾日本大学理工学部まちづくり工学科4年,

⁸⁾日本大学理工学部精密機械工学科3年, ⁹⁾日本大学工学部情報工学科3年,

¹⁰⁾日本大学生物資源科学部生命化学科3年, ¹¹⁾日本大学生物資源科学部動物資源科学科3年,

¹²⁾日本大学生物資源科学部森林資源科学科3年, ¹³⁾日本大学通信教育部商学部商業学科2年

はじめに

「日本大学 学生 FD CHAmmiT」とは、全国の大学が集結する「学生 FD サミット」の「日本大学版」である。「学生 FD サミット」とは全国の大学から学生 FD 活動に取り組む学生・教員・職員が一堂に会し、各大学における活動や成果を発表しあい、大学教育における課題等を共有し、議論する場である。一方、「CHAmmiT」とは、chat と summit をかけ合わせた造語であることから分かります。大学をテーマに友だちとチャットをするように気軽に話し合い、その成果を発表する場である。私たちが学ぶ大学の教育をより良くしたいという思いに基づき、学生のみならず、教職員が参加していることも大きな特徴である。

今回で10回目を迎える「令和4年度日本大学 学生FD CHAmmiT」（以下、CHAmmiTとする）は、オンラインと対面のハイブリッド形式で開催され、255名の参加があった。新型コロナウイルス感染症対策のため、室内の換気と備品のアルコール除菌を徹底して行った。大学に通うそもそもの理由に立ち返って、教育改善につながるアイデアの共有をした。今年度のテーマは、「あなたにとって大学とは、何ですか?」である。学生が大学に求めるものは人それぞれであり、理想と現実とのギャップに向き合うことで大学教育の改善につなげたいと考えた。そのため、今年度のCHAmmiTでは、コロナ禍での大学生活を経験した今だからこそ、改めて学生一人一人にとっての「大学の在り方」を見つめ直し、何を目的に学んでいるのかを考えてもらうことで、大学教育の改善に繋げてほしいという期待を込めてテーマを設定した。

1. 今年度の「CHAmmiT」の概要と流れについて

1 第1回スタッフミーティング（令和4年7月2日）

第1回ミーティングはコアスタッフと教職員のみで開催し、互いに自己紹介をして交流を深めた上で、CHAmmiTの概要と、今年度のCHAmmiTで行うメインのテーマについて話し合った。この2年間、オンライン授業にまつわるテーマだったので、その意図に沿いながら新しい教育改善につながるテーマを検討した。

2 第2回スタッフミーティング（令和4年7月16日）

第2回ミーティングでは、CHAmmiTについて学生スタッフに説明し、開催方法や大学全体としての教育改善について話し合いを行った。話し合った内容をGoogle Jamboard（以下、Jamboardとする。）にまとめ、全体で共有した。

大学全体としての教育改善については、全学的に推進でき、且つ教育改善に繋がる事として、授業中の交流が少ないが為に情報の共有ができていない状況を改善する事、授業や学習環境については施設に関しても含めて改善する事、授業内に於けるITツールを活用した対面授業を実施する事、オンライン授業とのハイブリッド化を行う事等が意見として挙げられた。

3 第3回スタッフミーティング（令和4年8月23日）

第3回ミーティングは今年初の対面と、オンラインのハイブリッド形式での開催であった。内容は今年のCHAmmiTの主題であった「あなたにとって大学とは何ですか？」をテーマとして、Jamboardを用いて意見をまとめ、考えの共有を行った。

グループによって「大学とは」のまとめ方に違いがみられ、理想と現実とを分けて考えるグループ、何のために大学での学修があるのかを深く考察するグループなど、それぞれに個性が出ていた。まとめると「ビジネス」（就職訓練校としての大学）、「アカデミック」（研究機関としての大学）のような大学の捉え方に分けられ、加えて友人と学びあう、人格形成のためといった意見も見られた。議論を進めるうちに自分が理想を求めて入学した理由と現在とのギャップに触れ、問題点について述べていたグループも多くあった。大学が何のためにあるのかを改めて全体で確認するとともに、現状との違いを深く考察できる機会になったミーティングであった。

ミーティング後には林理事長による懇談会が行われ、普段の学生生活での不満を直接伝えられる場が設けられた。多くの意見が学生側から挙げられ、それに対する理事長の見解をお聞きすることができ、有意義な時間を過ごした。

4 第4回スタッフミーティング（令和4年9月10日）

第4回ミーティングも対面とオンラインのハイブリッド形式での開催となり、本番さながらに、セッションテーマを使用して、それぞれのセッションテーマを深く掘りさげた。今回からグループのファシリテーターはコアスタッフではなく、学生スタッフが担当し、練習を兼ねた。

学生スタッフからは、まだまだファシリテーションに不安な声もあったが、グループワークの結果、専門的学修に対する満足感が指摘される一方で、オンライン授業と対面授業のバランスに対する不満が多く挙げられた。近年、オンラインでの授業が増えたものの、その手法が活かされないまま対面授業に戻るのは勿体無いため、オンライン授業と対面授業の双方の良い点は活かし、よりよい学生生活を送りたいという、学生

の学修意欲に対する強い意志を感じる意見交換が活発に行われたように感じる。学修の在り方について再確認する良いきっかけになった。

5 第5回スタッフミーティング（令和4年10月1日）

第5回ミーティングも、前回同様に対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、本格的なファシリテーションマニュアルの読み合わせを行った。

中でも、セッション1の「大学で、何を、何のために、どのように学びたいと思った？」では、対面形式とオンライン形式ではファシリテーション方法が違う為、コアスタッフがリードをしながら、共有を行った。セッション2「思い描いた大学生活を送れていますか？」と、セッション3の「あなたにとって、大学とは何ですか？～学部への提案～」では、Jamboardを使う為、付箋機能の確認を行った。そして、セッションごとのファシリテーターの役割を明確にし、ファシリテーションのコツを共有した。

ファシリテーションマニュアルをただ読むだけでなく、しっかりスタッフ間でサポートしあい、より良いファシリテーションへの理解を深めた。

6 第6回スタッフミーティング（前日リハーサル）（令和4年10月15日）

第6回ミーティングは日本大学 学生FD CHAmmitの開催前日に行われ、前回同様対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。本番に向けて情報共有、会場設営、オンライン・対面グループ双方のリハーサルを行った。

役割確認やアジェンダ、ファシリテーションマニュアルの最終読み合わせを行い、参加者全員で共通理解を図ったのち、対面グループは会場設営を開始した。通信教育部の机を動かし、模造紙や付箋、マーカーなどのしゃべり場の準備を行った。その後、本番と同じようにリハーサルを行った。本番を想定し、対面グループは模造紙、オンライングループはJamboardを用いてセッション1～3までを通して行った。実際に行うことで疑問点生まれ質問しているスタッフも多く、有意義な時間にすることができた。全体でのリハーサル終了後、場所を変えて、翌日のCHAmmit本番に向けた仕上げの作業と追加の練習会が行われた。

7 令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmit 当日（令和4年10月16日）

令和4年度は対面とオンラインのハイブリッド形式での開催となった。参加者は完全オンラインだった昨年度とは異なり、今年度は参加者の半数以上が通信教育部に集い、オフラインで活発な議論を行った。

スタッフは、参加者と見分けがつくように揃いのTシャツを身につけ、ネームプレートを首から下げてファシリテーションした。また、対面のしゃべり場では模造紙、及び付箋を使い、参加者同士の距離が近くなるように工夫をした。

7-1 10:30 スタッフ集合

対面参加スタッフは日本大学本部大講堂に、オンライン参加スタッフはZoomに接続して集合した。今年度のCHAmmitスタッフTシャツを配付し、出欠を確認した。

7-2 10:30～11:00 スタッフ最終打ち合わせ

キャプテンからの挨拶後、ファシリテーションマニュアルを使って当日の流れの最終確認を行った。最後にスタッフ全員で集合写真を撮影して、スタッフは役割に応じて、本部又は通信教育部の建物へ移動した。

7-3 12:30～ 一般参加者受付開始

対面参加者は、通信教育部に集合し、スタッフの案内に従った。一方オンライン参加者については、コアスタッフによる参加者のZoomの入室管理を行い、出席確認を行った。入室管理では、参加するグループ番号を事前に設定していたため、それぞれのセッショングループにおける人数調整の要否確認を行った。そして、Zoom入室後は注意事項を記したスライドを共有した。

7-4 13:00～13:30 オープニング

オープニングムービー上映後、日本大学FD推進センター長である大貫副学長と土屋キャプテンが挨拶をした。CHAmmiTの説明と当日のテーマとスケジュールの共有、注意事項の案内がされ、しゃべり場をより楽しんでもらうためのコツの共有が行われた。その後、オンライン参加者はブレイクアウトルームへの移動を開始するアナウンスに従い、それぞれのグループへ移動した。ブレイクアウトルームでは、ファシリテーターがタイムキープしやすいように、ブロードキャスト機能で残り時間のアナウンスを適宜入れた。

7-5 13:30～13:40 アイスブレイク

グループのメンバーが揃ったグループから、簡単な自己紹介と「もし、日本大学に新しく学部を作るならどんな学部を創設したいか?」というテーマで、自由に会話を楽しんでもらった。各参加者は、自分のアイデアをA4用紙に書き出してもらい、学部の異なる参加者同士が初対面でも会話を楽しんでもらう機会とした。

7-6 13:40～14:10 セッション①

「大学で、何を、何のためにどのように学びたいと思いましたか?」

セッション①では、学部混合グループに分かれ、大学で学ぶ目的について議論した。このセッションでは、参加者が普段の大学生活で「何を、何のために、どのように」学んでいるかを考えてもらう形式で意見の共有をした。対面グループでは模造紙に各自の意見を付箋で張り出し、オンライングループではJambordで同様の作業を行った。次に、参加者各自が大学に通う目的を整理したうえで、授業環境で良かった点、要望、改善すべき問題点について、意見交換を行った。日本大学に進学した理由や現在の目標を再確認することで、進学前に求めていたものや現状困っていることを参加者自身で整理してもらったが、そこには続くセッション②・③で意見を出しやすくする意図があった。

7-7 14:25～14:35 アイスブレイク

学部混合で実施したセッション①とは異なり、セッション②・セッション③では学部ごとのグループ編成であった。セッション①の前と同じテーマでアイスブレイクを行って意見を出しやすい環境づくりを図った。

7-8 14:35～15:25 セッション②

「『思い描いた大学生活を送れていますか?』あなたの理想は達成できていますか?」

セッション②では、実際の授業環境で満足している点と不満足な点を共有した。このセッションからは対面グループ、オンライングループともにJambordを使用して意見を出しあった。また、満足している点をピンク色の付箋で、不満足な点を青色の付箋でそれぞれ色分けして意見共有してもらうことで、授業環境の充実度を視覚的に把握できるようにした。満足・不満足の見出し終了後、付箋のグルーピングを行い、各学部の授業環境には、どのような点に強み・改善点があるのかを確認した。

7-9 15:35～16:25 セッション③

「あなたにとって、大学とは何ですか？～学部・全学への提案～」

セッション③では、同じ学部で集まってもらい、他学部で実施されているが、自学部に取り入れられていない制度など、これまでのセッション①とセッション②で議論・共有した内容をもとに、自学部と大学に提案したいことについて話し合った。このセッションでは、学部提案書を作ることを目標にしていた。グループ参加者は、自身が感じる不満点を改善するアイデアや他学部で実施されている有用な制度の共有を行い、日本大学全学で取り組むべき企画や自学部で実施してほしい取り組みの案をまとめた。

7-10 16:30～17:00 エンディング

エンディングでは、対面グループも Zoom に接続し、セッション③で作成した学部提案書の発表が行われた。酒井学長と田中キャプテンが挨拶後、集合写真を撮影し、エンドロールを上映し、令和4年度 CHAmmiT は閉会となった。

2. 参加者の制作物の分析

本節では、「令和4年度 学生 FD CHAmmiT」のセッション①～③の制作物の分析を行う。

セッション① テーマ『大学で、何を、何のためにどのように学びたいと思いましたか？』

セッション①では、学部混合でのグループに分かれて、模造紙と付箋を用いて、「大学で学ぶ目的」をみんなで考えて話し合った。以下の表の様に、「何を」「何のために」「どのように」の3つの項目で分けて、大学で学ぶ目的や実際とのギャップを挙げていった。次に良かった点、問題点、要望についても同様に挙げていった。学びをアウトプットするためのグループワーク等の学生間交流についてや Wi-Fi をはじめとする授業環境等についての意見など、コロナ禍後ならではの意見が多く出たと感じる。また、3年ぶりの対面での開催ということもあり、緊張もみられたが、つつがなく進められていたと思う。

セッション② テーマ『思い描いた大学生活を送れていますか？』

セッション②からは、同学部で集まり、Jamboard を使用した。セッション①では、自分の大学に通う目的や授業環境で良かった点などを挙げてもらったが、セッション②からは、セッション①の内容を活かし、学生と教職員の両者から意見を挙げてもらい、日本大学の教育の理想と現実の差として、「各学部の改善できる問題点は何か？」を「満足」と「不満足」の2方向から深く掘り下げていった。セッション③の学部提案書に繋がる大切なセッションであるため沢山の意見が出て来た。コロナ禍の影響の残る学部からはそれに対する規制緩和、それ以外の学部では各学部の特色をより活かせる改善案が出て来たように感じる。

セッション③ テーマ『あなたにとって、大学とは何ですか？～学部への提案～』

セッション③では、先程と同様のメンバーで、これまで話し合ってきた内容を活かし、学部ごとに「理想の大学生活について」話し合った。そして、その内容をより具体的な提案書という形で記していくに当たり、「現状の問題点の分析」、「学部を『理想の学部』にするための提案」、「日大を『理想の大学』にするための提案」の3つの項目について書いてもらった。これにより参加者もより明確に自分の考えを整理することが出来たと思う。

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
1-オ対. 法学部	<p>a. 課題へのフィードバックの量。</p> <p>b. 交流機会の量。</p> <p>c. 施設や設備について。</p>	<p>d. 学生のモチベーション向上のためフィードバックの活発化。</p> <p>e. 他学年・他学科との交流機会を設ける。</p> <p>f. ポータルシステムの機能改善・向上。</p> <p>g. 全棟での設備統一化。</p>	<p>h. システムの統一化。</p> <p>i. イベント参加機会の増加。</p> <p>j. アドバイザーの増員。</p> <p>k. 全学的な学生・教職員向けアンケート（目安箱）の設置。</p>
2-オ. 文理学部	<p>a. 学科横断型授業について、学科横断の意味が吟味されておらず、曖昧な状態であること。</p> <p>b. 幅広く展開できるほどの教員数がない。</p> <p>c. 日本語が不自由な人に対する説明が少し足りない。</p>	<p>d. 全学科の教員、学生を交えた会議を行う。</p> <p>e. 専門的な授業内容であるが故に、他学科への授業参加の困難さが目立つため、他学科聴講生のための授業も開講してほしい。</p> <p>f. 一番増やしやすいと考えられる外国語科目の教員の増加や、教員の他学部への派遣をしてほしい。（オンラインでできるのであればそれも可）</p> <p>g. 学科学生を留学生に1:1で付けて日本語を向上させたり、日本の学生に多文化を知る機会を作ること。特に必修科目については同じ授業を聞くため、行いやすい。</p>	<p>h. 横断型授業について、他学科の方に自学科の専門性の高い内容を学びやすい環境を作してほしい。</p> <p>i. 留学生へのサポートが足りないと感じるため、日本語話者との定期的な交流の機会や、希望者には大学生生活について相談しやすいようにバディ制度を導入するなどの対応が欲しい。</p>
3-オ. 文理学部	<p>a. 学生同士の交流（飲食や会話等）をしながら学ぶスペースがない。</p> <p>b. 学びをアウトプットする環境がない。</p> <p>c. 知識を与える受動的な講義が多く、先生側のリアクションもないため、学生が能動的に講義に参加するスタイルの講義が少ない。講義形態にかかわらず対面に戻ってしまっている。</p> <p>d. ネットワーク設備の拡充について、学部側が対応済みとの認識であり、学生数に対応しきれていない。学内の開放パソコンの利用が進んでいない。</p> <p>e. 課外活動や学外における接点が少なく、アウトプットに対してハードルが高い。</p>	<p>f. 学生に空き教室を分かりやすくする。</p> <p>g. 授業形態の見直しを行う。（対面やオンデマンド授業）</p> <p>h. 学内の開放パソコンの使用を推進する。</p> <p>i. 課外活動の量を増やす。</p>	<p>j. 講義によってどの形式が適しているのを見直す。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
4-オ. 経済学部	<p>a. 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハイブリッド型の授業が少ない。 ・オンラインとオンデマンドの授業でコマが被ってしまうことがある。 <p>b. 施設内で Wi-Fi が弱い箇所がある, コンセントが足りないところがある。</p> <p>c. 運用について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインブースの利用手続きの工程が多い。 ・必修授業の選択ができない。 ・経済学部には運動部に所属する学生のための授業がない。 ・公欠申請の工程が多い。 	<p>d. 原則対面の緩和をし, 様々な学生の要望に合わせてオンラインやハイブリッドにする。</p> <p>e. ハイブリッド型にすれば電気の使用量が減り停電の可能性も低くなる。</p> <p>f. 教職員がオンラインの利用方法について研修をして能力を高める。</p> <p>g. オンデマンド授業は他の授業と被らないように時間設定する。</p> <p>h. コンセントを増やす。</p> <p>i. Wi-Fi の点検。</p> <p>j. 電気・通信関係の改修。</p> <p>k. エコリンクオンラインブースについて, 予約システムのオンライン化と窓口での手続きを自動化する。</p> <p>l. ゼミと必修授業が重なったときに, 受講する必修授業を選べるようにする。</p> <p>m. 競技部の学生が受講しやすい専用科目を作る。</p> <p>n. 公欠届のペーパーレス化。</p> <p>o. 教員が質問に回答する期限を作る。</p> <p>p. 学生にアンケートをとって要望を調査し, それを踏まえた大学の対応を保護者に周知する。</p>	<p>q. オンライン化を進める。</p> <p>r. 学部間の交流・連携を増やす。</p>
5-オ. 商学部	<p>a. 学生が学ぶ喜び・目的が分かっていない。</p> <p>b. 全学部の交流イベントが少なく, 交流機会を提供しても参加者が少ない。</p> <p>c. 生徒があまり積極的ではなく, 大人数の授業の場合先生との距離が遠い。</p> <p>d. 一日のコピー制限がある。</p> <p>e. フィードバックがない。</p>	<p>f. 将来へのつながりを知るきっかけを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心のケアとして友達作りの場を設ける。 ・シスター制度をつくり, 先輩が1人の生徒につく。 <p>g. 意欲や目的がある学生同士で小さなまとまりの交流を行う。</p> <p>h. 学生が積極的に授業を受けられるように, とりたい授業をとれるようにする。また, 意欲のある学生はオフィスアワーを活用しやすいようにする。</p>	<p>k. 社会人との交流の場を設ける。</p> <p>l. 交流イベントを増やす。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
		i. 一日当たりのコピー制限を廃止する。 j. 生徒からの質問を全体でPDF共有する。	
6-オ対. 芸術学部	a. オンライン授業になったことで、受講者数が増え、教員の負担が増えた。また、生徒への十分な対応もできなくなっている。 b. 他学科との授業交流が不十分である。	c. 助手・職員・学生で教員をサポートする体制をとる。 d. 授業として他学科交流の機会を作る。 ・一般教養科目の中に他学科交流授業を作る。 ・各学科の基礎的な授業を受けられるようにする。	e. 学部間の様々な差別をなくしたい。 f. 目安箱を設置する。
7-オ対. 国際関係学部	a. 対面とオンラインの区別が曖昧であり、授業の質にも差が出ている。 b. 国際関係学部と短大のビジネス教養学科の連携が少ない。 c. Wi-Fi環境が不十分。	d. 引き続きオンラインを活用し、Zoom等で講義の同時配信を行う。 e. 月一回程度で教職員間での意見交換を行い、目安箱のように学生側からも意見を出しやすい環境作り、それらの見える化。 f. Wi-Fiの点検や工事等を行うことで、Wi-Fi環境の更なる拡充を図る。	g. 他学部と連携した講義を作る。 h. ワールドカフェみたいな交流の場を、全学年対象(学年関係なく)として増設する。
8-オ対. 危機管理学部	a. シラバス 専門的な学びはできているもののシラバスの扱いが雑。シラバス通りに進まない・違う講義で同じ動画を流す授業も。 b. 準備環境 授業レジュメ等で使いたい、プリンターの紙補充などがされていないことがある。 プリンターを使用しようとしてもプリンターの名前と場所が一致しない。無駄な移動をしなければならないこともある。 c. 学生・教員のモチベーション維持 やる気のない学生に注意しない教員がいて、授業に集中できない。学生の意識は教員にも伝播する。	d. シラバスや授業環境の改善のため、シラバス・授業準備マニュアルの改訂資料配布の方法統一化。 e. プリンターの名前変更。	f. 授業資料作成講座の開催。 g. 各学部で学生・教員の成績表彰。

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
9-対. スポーツ科学部	<p>a. 試合などが重なり、履修登録に余裕がない。</p> <p>b. 授業評価アンケートの結果が反映されているのか分からない。</p> <p>c. 充実した施設があるにも関わらず、授業で使われることがない。個人でも使用が難しい。</p>	<p>d. 履修登録期間の延長。(現在の2日前から開始)</p> <p>e. 点数や評価に対する改善策をシラバスに掲載。</p> <p>f. 各授業の具体的な内容やその評価が明らかになっているサイトを学部内で作成。</p> <p>g. 施設を利用した実践的な授業の構成。</p> <p>h. 施設に関する規則の緩和。コロナ前に出来ていたことを出来るようにしてほしい。(自転車置き場から直接キャンパスに入れる自動ドアの開放など)</p>	<p>i. 全学部の情報を仕入れられるシステムの構築。(電子掲示板などを開放し、他学部の情報が仕入れられるようなもの)</p>
10-オ. 理工学部	<p>a. 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料や動画の配布がない。 ・成績開示が遅い。 <p>b. 課題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価基準が学生からは見えにくい。 ・返却や解説がない。 ・提出方法がバラバラである。 	<p>c. 著作権などの問題について学生に情報発信する。</p> <p>d. 成績開示期間を早める。</p> <p>e. ルーブリックの設定・開示を行う。</p> <p>f. 紙媒体かデータかで課題の提出方法を統一する。</p>	<p>g. 特になし。</p>
11-オ. 理工学部	<p>a. 産学連携が少ない。</p> <p>b. 留学ができない。</p> <p>c. オンライン化で質問がしにくい。</p> <p>d. パソコンの充電場所が少ない。</p> <p>e. 研究に対する意識が早い内にできない。</p> <p>f. 事前の説明とは異なった授業内容が実施されており、繋がりが見えない。</p>	<p>g. 研究室から先端技術についてアピールできる機会を設ける。</p> <p>h. 学科教員が制度を理解し、説明できる様にする。</p> <p>i. 教員が学生を連れて説明を聞きに行く。</p> <p>j. 基礎教育科目の中で、関連する専門科目について触れる。</p> <p>k. 卒業研究が始まる前から、学会に出られる様にする。</p> <p>l. 大学説明会等で、過度に聞こえの良い情報ばかり発信せず、現実的な情報も伝える様にする。</p>	<p>m. 説明会を設ける。</p> <p>n. 基本は対面で質問する様に指示する。</p> <p>o. アフターコロナを考慮した充電設備を設ける。</p> <p>p. 研究室に足を運べる制度を作る。</p> <p>q. 1年生の時に説明の機会を設ける。</p> <p>r. もっと教員側から学生に歩み寄り、認識のズレを防ぐ。</p> <p>s. 予め教員に、学生と教員間で知識量に差がある事を伝える。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
12-オ対. 生産工学部	<p>a. 1年生はパソコンで資料作製が先生の思っているよりできていない…Word, Excel, PowerPointも慣れていない。</p> <p>b. ネット環境 特に数理情報工学科はデータの大きいアプリ等を使用するため、授業で全員が一斉にPC作業をするとWi-Fiがつかず、作業ができない。</p> <p>c. 棟と棟の間が遠いため、移動が困難。例) 39号館から37号館) また、実初と津田沼の行き来が困難なため、上級生の教養1年生科目の履修が難しい。</p> <p>d. 下級生は研究室の交流がないため、ゼミや研究室を選ぶ際に参考となるものがない。また、TAはいるが、授業時間外に質問をしに行きにくい。研究室の雰囲気が怖い。</p>	<p>e. 教員側が、学生が不慣れなことを考慮した授業展開にするだけでなく、アカデミックアドバイザーのように、PCの使い方を教えてくれる人を常駐させた上で、動画等でも説明があると良い。</p> <p>f. ・空き教室を活用する。 ・学部で階層を決めない。 ・教養科目を津田沼でも実施する。 ・オンライン授業の活用。</p> <p>g. ・研究室に行きやすい雰囲気づくり。 ・研究室ツアーの実施。 ・上級生と気軽に話せる環境づくり。</p> <p>h. 授業時間を有効活用するための手法の導入。 例) 反転学習など 反転学習を実際に取り入れている先生がいるため、それを参考とし進める。すべてにおいて反転授業の実施をすれば、自然に慣れると考えられる。また、その実施により考える学習も自然に増すだろう。 ・考える手法を知りたい。 例) KJ法 ・教員間で授業の質の差があるため、ベストオブ先生賞をつくる。 ・テストにおける、点数開示や解説を必ず行う。</p>	<p>i. 他学部との交流機会を増やす 例) CHAmmiT やワールドカフェのようなもの。また、他学部との情報共有を図る。</p>
13-オ. 工学部	<p>a. 教育とカリキュラム</p> <p>b. 授業</p> <p>c. 教員</p> <p>d. 今後の展望 (アフターコロナ)</p> <p>e. ICT</p>	<p>f. 学部、教員、生徒での意見共有の場を設ける。(生徒は教員に対する生徒の指摘後の学部から教員に対する指導を知らない)</p> <p>g. 課題の提出先の統一。</p> <p>h. ポータルサイトの使い方を学期途中に変えないでほしい。</p>	<p>i. 他の学部との共有の場を増やす。(運動含め)</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
14-オ. 医学部	<p>a. カリキュラム 他学部の講義や一般教養の講義を受けられない。</p> <p>b. 学校環境 ・ネットが弱い。 ・部活が少ない。 ・食事の環境。</p> <p>c. オンライン授業 メールやクラスルームでの質問がしづらい。</p> <p>d. システム</p>	<p>e. 医学関係以外の講義(一般教養など)の選択科目を増やす。 例) 経済学の基礎 ・医療系学生(看護学生など)との交流機会を増やす。</p> <p>f. ・更なるWi-Fiの強化(特に組織実習室など)。 ・学生主体のイベントを開きやすくする。 例) 講義部屋や体育館などの施設の利用申請をしやすくする。 ・キッチンカーの値段を安くする, もしくは学食をつくる。</p> <p>g. 気軽に質問できるチャットシステムなどをつくる。</p> <p>h. ポータルサイト・moodleなどのシステムを統一する。</p>	<p>i. 医学部を含めた他学部との交流講義を増やす。</p> <p>j. 学部間での交流機会や部活を作ることなどをしやすくする。 例) e-sports 部</p>
15-オ対. 松戸歯学部	<p>a. 学修スペースに関して</p>	<p>b. 先生方は授業アンケートのフィードバックをするだけでなく, これからどうするかを具体化してほしい。</p> <p>c. 空き教室と自習室の空き教室の時間, ルールを明確にしてほしい。</p> <p>d. 1~4年生が自由に使用できる実習室の確保。(院内生用実習室の使用許諾, 等)</p>	<p>e. 特になし。</p>
16-オ. 生物資源科学部	<p>a. 課題提出の統一化がされていない。課題提出の期限や提出場所, 提出方法が分からないことがある。</p> <p>b. 教職員が受け持つ学生数について改善してほしい。 ⇒多いと学生へのフィードバックができないことにつながる。</p> <p>c. 実験の回数が少ない。 ⇒天候やコロナ関連で実習や実験が少なくなってしまうこともある。 理系学部として学費を支払っているため, その分の学びを大学で経験したい。</p> <p>d. 研究室が足りていないように思う。</p>	<p>f. Google クラスルームのTODOリストを使用してほしい。 ⇒使用にあたって提出期限とその締め切りは対応させてほしい。(今日中に提出なのに無期限になっているなど)</p> <p>g. 教職員が受け持つ学生数を調整してほしい。(100人までなど) ⇒学生側から出る意見としてフィードバックがないことがよく挙げられる。これは受講者数が多いために先生方の対応が難しくなっているのではないかと考える。</p> <p>h. 振替講義などでなくなってしまった分の実習や実験は少しでも多くできるようにしてほしい。</p>	<p>k. 課題提出方法の統一化をしてほしい。具体的にはT O D Oリストでの提出を基準としてほしい。</p> <p>l. CHAmmiTの継続的な実施によって教職員と学生が意見交換できる場が欲しい。</p> <p>m. 総合大学としての強みを生かした交流の場が欲しい。この交流によって多様な価値観や考え方に触れることができ人脈形成や人生の歩み方が多様に拓ききっかけになると考える。 E X.) 他学部の講義を受けられるイベントを通じた交流など。</p> <p>n. 不祥事に対して具体的な改善策が都度見れるようにしてほしい。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>e. 学生生活に関する情報が散分している。 ⇒情報を発信するツールが複数あるため発信する教職員側も受け取る学生側もストレスに感じ、重要な情報も拾い損ねる可能性がある。</p>	<p>i. コロナ対策による実験室の使用人数の制限を緩和してほしい。(班構成の改善など) j. 情報ツールの統一化をしてほしい。 ⇒講義に関する連絡はクラスルームやGメールなど。履修登録などのみポータルサイトの使用など。 情報の統一化により学部イベントの情報も受け取りやすく、イベント参加への士気が向上し学生同士の交流にも繋がる。</p>	<p>o. 検温の入力が意外と大変で入力している学生が少なく感じる。そのため必要性の有無について再考していただきたい。</p>
<p>17-オ. 生物資源科学部</p>	<p>a. 研究室費が偏っている。 b. 決まりを守っていない学科がある。 c. 教職課程をとっている人への大学側の対応があまい。 d. 先生が動画をアップロードするかを決めている。</p>	<p>e. 配属人数を調節する。 f. 意見を出しやすい環境を作る。 g. 窓口を設置する。 h. 先生全員が講義動画をクラスルームに挙げて欲しい。</p>	<p>i. 匿名で送れる目安箱の設置。</p>
<p>18-オ. 通信教育部</p>	<p>a. 授業環境について授業の配信が時代・やり方に沿っていない、授業内容の更新が追いついてない、先生によって熱意が違い授業の濃さが違う。 b. 学部内外の学友・教職員との交流の機会が少ないこと。</p>	<p>c. Zoom 授業でも youtube (アーカイブ) 配信を増やす。 d. メディア授業の内容・教科書を更新してもらいより深い学修にする。 e. 授業に対する熱量を増やす。(学生・教職員) f. 学部 miniCHAmmit などの開催。</p>	<p>g. ポータルの統一。 h. 教員の全学部間共有・授業に対する認識合わせ。 i. オンライン化の促進。 j. CHAmmit 年2回開催。 k. ワールドカフェ(通信の通知・参加, 全学年参加)</p>
<p>19-対. 文理学部</p>	<p>a. 通信環境(Wi-Fi)の弱さ。 b. 紙媒体での出欠管理。 c. コピー費用。 d. 課題の提出方式。 e. 課題に対するフィードバックの少なさ。</p>	<p>f. 学部全体での通信環境強化。ポケットWi-Fiの導入など。 g. 出欠管理における学生証スキャン方式の導入。 h. 他学部(危機管理など)で導入済みのコピー機利用ポイント制度の導入。 i. 課題提出に関するマニュアル作成・講演会の実施。 j. シラバス上においてフィードバックの有無や量の記載を行う。 k. フィードバックの必要・不必要についてアンケートの実施。</p>	<p>l. 通信環境の保障を行う。 m. 学部間でのコミュニケーション。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
20 -対. 文理学部	<p>a. 教職員の対応の差。</p> <p>b. 学習支援システム black board の使い方が分かりにくい。</p> <p>c. 就活を意識した授業からの脱却。</p> <p>d. キャンパスの点在による交流機会の低下・目的不足。</p>	<p>e. 教職員用ガイドラインの作成・学生への明確化。</p> <p>f. 教職員同士の交流の場の増加。</p> <p>g. 学習支援システムの利用方法に関するガイダンスや相談会の設置。(オフライン)</p> <p>h. 目的意識の持った交流の場の設置。</p> <p>i. 単位目的の交流の場の廃止。(ワールドカフェ等)</p>	<p>j. 他学部・他学科で自身の研究や興味のある授業, 学生・教職員をつなげるシステムの構築。</p> <p>k. 全ステークホルダーから「愛される日大」への生まれ変わり。</p> <p>1. 在学中の学内起業支援・促進。</p> <p>m. 学費収入に依存しない大学の運営方法の構築。</p> <p>n. 日大(学部)へのインターンシップ。</p> <p>o. 各種運動部の試合観戦の促進。</p> <p>p. 全学統一システムの構築・運用。</p>
21 -対. 経済学部	<p>a. 人数が多く, 教室に入れない。</p> <p>b. 通年でしか履修登録できない。</p> <p>c. 就活向けの講義が少ない。</p> <p>d. 先輩後輩や他学部間の交流が少ない。</p> <p>e. 課題提出方法の統一ができていない。</p> <p>f. シラバスに授業の詳細が書かれていない。</p> <p>g. ゼミの定員が埋まっている。</p> <p>h. ゼミの情報が入ってこない。</p> <p>i. ゼミの広報が行き届いていない。</p> <p>j. 通信が重い。</p> <p>k. 教室数が不足している。</p> <p>l. オンライン授業が学内で受講できない。</p>	<p>m. 同科目名の講義を増やす。</p> <p>n. 履修者数に偏りが出ないように, 曜日時限を調整する。</p> <p>o. 学生に人気の講義を次年度に増やす。</p> <p>p. 学部内・外ともに交流機会を増やす。</p> <p>q. 同じ講義を週に何回か行う。</p> <p>r. 可能な範囲で先生方に統一していただく。</p> <p>s. 授業アンケートを学生が見れるようにする。</p> <p>t. 学内に授業評価がみられるツールを作る。</p> <p>u. ゼミの情報を頻繁に更新する。</p> <p>v. Wi-Fi の強さを高める。</p> <p>w. オンラインブースの数を増やす。</p>	<p>x. 相互履修制度を充実させる。</p> <p>y. 教員と学生の相互に評価制度を設ける。</p> <p>z. 学部の垣根を超えて交流機会を増やす。</p> <p>1. 学部間で, 相互にサービスを利用できるようにする。</p> <p>2. 学部に関係ない講義を作る。</p> <p>3. 志望動機などを聞いて個人を尊重しあう。</p> <p>4. 学生と教職員との連携を強化する。</p> <p>5. 説明会以外にも先輩と交流できる場を設ける。</p> <p>6. ネットワーク回線を強化する。</p> <p>7. 個別オンラインブースの充実。</p>
22 -対. 芸術学部	<p>a. Wi-Fi が弱い。</p> <p>b. 授業設備が非充実である。</p> <p>c. 学科の機材の貸出しがしにくい。</p>	<p>g. どの校舎にいても使えるように, 学内の Wi-Fi を統一したり, Wi-Fi が届くエリアを広くしたりするなどして Wi-Fi を使いやすくする。</p>	<p>s. 他学部との授業での交流がほぼないので, 総合大学ならではの授業を実施する。</p> <p>t. 自主創造の授業の目的を示す。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>d. 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業アンケートの結果の改善が見られない。 ・授業内容が1～20年前と同じである。 ・教職科目が卒業単位数に含まれない。 <p>e. シラバスからの情報収集が困難である。</p> <p>f. 必修科目に自主創造が含まれている。</p>	<p>h. 授業時間外の交流を増やせるように、学生が交流できるスペースを増やす。</p> <p>i. 学科の機材をネット予約できるようにする。</p> <p>j. オンラインで誰でも見れる機材リストを作る。</p> <p>k. 他学科に機材を貸出しする。</p> <p>l. 教員が授業評価アンケートの結果を受けてどのように改善したのかを周知する。</p> <p>m. 放送学科の専攻を確定する前に授業見学の機会を設ける。</p> <p>n. 学期始めの週などで体験授業を全学科増やす。</p> <p>o. LiveCampus, 時間割システム, ポータルサイト, ガイダンスサイトを統一する。</p> <p>p. 自主創造の授業を必修科目から除外する。</p> <p>q. 土曜日に必修科目を設置しない。</p> <p>r. 身体ケアを体育の授業に取り入れる。</p>	
23-対. 国際関係学部	<p>a. 対面とオンラインの評価基準が同様で、対面参加の利点がない。</p> <p>b. 講義資料を授業内で確認する際にフリーズしてしまう。</p> <p>c. 15号館を中心に見えない映像、聞こえない講義等AVシステムが耐用限度を超え授業に支障がある。</p>	<p>d. Wi-Fi環境の改善が望ましい。動画視聴の充実や学内でのオンライン学習環境を整える。</p> <p>e. 今後のハイフレックス授業も強く念頭に置いた新AVシステムを順次導入。現状対処として全教室のAV(マイクやスピーカーのプロによる点検は必須)。同時にLMSの導入も検討する。</p>	<p>f. ワールドカフェ以外の他学部との交流機会を設けるほか、日本一の規模や多様な学びを活かすための学部間連携(授業/研究系+コミュニティ系)とOB/OGとの交流拡大を図る。</p>
24-対. 理工学部	<p>a. 人との交流が少ない。</p> <p>b. 課題の量と難易度が考慮されていない。</p> <p>c. 課題の提出手段の統一化とCST-VOICEの改善。</p> <p>d. 実験実習科目の対面形式での実施。</p>	<p>e. 授業内での交流機会を増加(グループワークの実施)させる。</p> <p>f. 教授間で課題に関する情報共有を行う。</p> <p>g. 教員向けに使用方法に関する講座を実施する。</p> <p>h. 学生に対し、使用方法を説明した資料を配布する。</p>	<p>k. サークル活動の活性化を行う。</p> <p>l. 学部間交流イベントを実施する。</p> <p>m. 学生から課題にかかる時間や難易度に関する意見を集め、フィードバックを行う。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
25 -対. 理工学部	<p>a. 非常勤の先生方へのオンライン授業のための機能の説明が不十分。また、十分に理解していない。</p> <p>b. 先生がフィードバックを行っていない。</p> <p>c. 授業に対する学生の改善案が届いていない。</p> <p>d. CST-VOICE でログインが多重に要求される。</p> <p>e. 使用するアプリが多い。</p> <p>f. 教室設備の基準が定められていない。</p> <p>g. 学生への状態調査が足りない。</p>	<p>i. 緊急時の Q&A やチャットサービスを常設する。</p> <p>j. オンライン併用しながら、対面形式に移行させる。</p> <p>h. 学校側からの学生交流の機会や場所の提供がない。</p> <p>h. 定期試験後の授業外にオンラインで返却し、フィードバック動画の配信をする。</p> <p>i. アンケートを実施し、アンケート結果や改善案を学生側に提示する。</p> <p>j. アンケート調査を実施し、教室設備基準を設ける。</p> <p>k. 特定の教室を開放するなどして交流場所をつくる。</p>	<p>l. ZOOM などの使用が不自由な先生の授業に T A の学生がつく。</p> <p>m. オンライン授業に必要なことを学べる先生用の研修会を用意する。</p> <p>n. 学生側からシステムなどに対する改善案を提出できるフォームを作成する。</p> <p>o. 教室が使いやすくなるように、大学での感染対策のルールを統一する。</p>
26 -対. 理工学部	<p>※★は特に印象に残っている問題点として上げられたもの。</p> <p>★ a. 基礎科目が多すぎて負担が大きい。 →教授間の課題量の共有ができていない。</p> <p>b. 他大学で対面授業が始まってもオンライン授業が続いた。 →大学全体の対応が遅い。</p> <p>c. 学生時代にゼミが一度も対面で行われなかった。 →話し合いが行いづらい。</p> <p>d. 5,6 限の授業が対面(専門・言語系)。 →空きコマがあったり、遅い時間だけ登校する必要がある。</p> <p>(e. オンライン授業になったのに設備費が取られた。 →お金の使い道の開示が不十分。)</p>	<p>t. 教授間で課題の量を共有し、課題を出す時期を調整する。</p> <p>u. 対面でもできる環境と対面を行う方法のルールを作る。</p> <p>v. 遅い時間の授業をオンラインにし、早い時間の授業を対面にする。</p> <p>w. 空きコマを有効活用できるようなシステム(例 復習機能)を CST-VOICE または CANVAS に追加する。 (x. お金の使い方の開示を行い、学生が意見できる期間を作る。)</p> <p>y. オンラインでも交流の場は作れるので、意見を話せる場・授業以外で学生が交流できる場を定期的に設ける。</p> <p>z. VR・メタバース空間を用いた常設の学生・教職員の交流が可能な場所をつくる。</p>	<p>18. 大学全体で、問題が起きたときに話し合う手順を決めておく。</p> <p>19. 学部数が多いという日本大学のメリットを活かし、他学部との交流ができるイベントを増やす。</p> <p>20. 単なる交流にとどまらず、ディスカッションやその学科ならではの視点から意見を言える機会を作る。</p> <p>21. 各分野の教授の専門分野に関する専門的なことを教われる場を作る。</p> <p>22. 成績が出たらメールでお知らせを通知する。</p> <p>23. 答案返却の義務化。</p> <p>24. 分かりやすいシステムの構築と徹底周知を行う。</p> <p>25. 授業の質を均一化するためにオンライン講義用のフォーマットを作る。</p> <p>26. 不満を挙げられる場、その意見を確認できる場を作る。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>★f. 他学部・他学科との関わりが少ない。 自主創造やCHAmmiTといった機会はあるが、4年間を通じた長期的な交流はなく、校舎が遠い学生との交流も少ない（サークルも同学部の学生が多い）。</p> <p>g. 学生数が多いため、学生同士の一人ひとりとの関わりが少ない。</p> <p>h. 学生数が多く、立った状態で受けなければいけない授業がある。</p> <p>★i. 成績開示がすごく遅い。</p> <p>j. 試験の答案が返却されない。 →自分の理解できていない点分からず復習ができないので力を十分伸ばせない。</p> <p>k. 評価基準が適当。</p> <p>★l. 教授のメールに対するレスポンスが遅い（教授当てに来るメールの数が多いので学生からの連絡に気づくのが困難）。</p> <p>m. 学生によって態度を変える教授がいる。</p> <p>n. 教授によってオンライン授業の質に大きな差がある（授業を勝手に進められるなど）。</p> <p>o. 学務課が仕事をしない（成績の誤りの修正をしないなど）。</p> <p>★p. 学生によって意欲・態度・主体性に差がある。</p> <p>q. 編入を目的とした学びをする学生が多い。</p> <p>r. 出席カードをタッチしてそのまま帰る「ピ逃げ」や代理出席などが常習化している科目がある。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. グループワークを増やす。 2. イベントの実施。 3. 受講者の抽選を実施する。 →抽選に外れた人はオンラインで受けられるようにする。 4. 受講希望者が多い場合はオンライン授業に切り替える、2部屋に分けて授業を行う。 5. 成績開示する期間などの基準を設ける（遅くなる場合は理由を教える）。 6. 個人の提出したテスト・レポートなどの答案用紙を開示する期間を作り、必要のある学生は担当教員の研究室に行くで見られるようにする。 7. 学生に基準を明確かつ詳細に伝える 8. シラバスにより細かな成績評価基準を記載する 9. 学生からの連絡とその他の連絡を分けるために、学生からの連絡はCST-VOICEなどで行う。 →CANVASに連絡機能があるが知られておらず機能していないので、教授・学生が使えるように指導する。 10. 質問しづらいと思ってしまいう学生のために、質問のフォーマットを作り、簡単に書き込めるようにする。 11. 学生のマナーを向上させるために指導を行う。 ・質問などでのトラブル防止のために質問フォームを作る（何が、どのように、などといった項目に分け、単純な文章を入力すれば良いようにする）。 12. 授業の質を学務課でチェックする。 13. オンライン授業の録画の徹底。 →後から見返せるので復習しやすい。 	<p>27. 単位を落とす、勉強が不得意である、といった学生に対する救済を行えるシステムの構築。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>★s. 校舎の移動が大変。 (研究室が船橋校舎にあるが授業は駿河台校舎で行われる, 教室移動が多い)</p>	<p>14. 不満を挙げられる場, その意見を確認できる場を作る。</p> <p>15. 各学生の能力に応じた授業を行う。</p> <p>16. 授業への出席の確認に対する取り締まりの強化を行う。</p> <p>17. 研究室を設置する校舎と授業を行う校舎を同じ校舎にする。 ・学生の教室移動を極力減らすように授業を行う教室を割り当てる。</p>	
27-対. 生産工学部	<p>a. 教授と生徒の意思疎通ができていない。(機会がない)</p> <p>b. 他学部との交流の場所がない。</p> <p>c. 大学への要望を出すところがない。</p> <p>d. フィードバックがない。 ⇒多くの学生がいるため教員の時間が足りていない。</p> <p>e. グループ学習向けの環境がない。(椅子が固定されている)</p> <p>f. 大学のWi-Fiが繋がりにくい。(授業に影響)</p>	<p>g. 教授と理想の授業を共有できるチャットルーム。(google)</p> <p>h. 目安箱の設置。</p> <p>i. 学生のしたいモノづくりを生産工学部内で集めて, 連携して生産工学特別演習で扱う。(金銭的補助)</p> <p>j. アクティブラーニングやグループワークができる部屋(自在に動く机・椅子)の設置。(大人数の授業でも利用可能な教室の確保)</p> <p>k. 回線速度の実測値を証拠として提示して改善を促す。</p>	<p>l. 全学共通のチャットルーム。(教授と学生)</p> <p>m. 学部学科問わず, 多くの学生と交流, 共同活動できる掲示板の作成。</p> <p>n. 掲示板で他学部間の専門性を生かしたプロジェクトを行う。(日本大学16学部87学科無限の連携)</p>
28-対. 生産工学部	<p>a. 他学科との交流が少ない。</p> <p>b. 教授同士の情報共有や学生に教える技術が不足している。</p> <p>c. 二学期生の名残があるのか, 授業選択の幅が狭まっている。</p>	<p>d. 他学科と共通の科目で必修のものを設けたり, 他学科と同じ教室で授業を受けるものを設ける。</p> <p>e. 学科間のワールドカフェを設ける。</p> <p>f. 学生に対する教え方の講習を行うとともに, 学生主体の講義を設ける。</p>	<p>a, d. 他学科との交流を図るため, 講義等において複数の学科で共通の必修科目を設置する。</p> <p>b, f. 講習や講義形態の意見交換の場として, 学部事務における会議に学生が参加する。</p>
29-対. 工学部	<p>a. 施設が古く, 利用しにくい場所がある。</p> <p>b. 人数に対してのWi-Fi設備が整っていない。</p> <p>c. CHAmiTのような機会が少なく, 視野を広げにくい。</p>	<p>h. 生徒の意見を取り入れた施設を作り, 学生の意欲向上を図る。</p> <p>i. Wi-Fiを強化してほしい。</p> <p>j. 各学年ごとに学生中心の意見交換会を実施する。</p> <p>k. 掲示場所を見やすく分かりやすく管理して使用する。</p>	<p>p. 学部間履修を気軽にできるように全学的にポータルサイトのシステムを統一してほしい。</p> <p>q. 大学と高校の連携強化。</p> <p>r. 日大内の他学部見学ツアー。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>d. イベントの掲示が少なく交流がしにくい。</p> <p>e. 同一の授業でもクラスごとに難易度が異なる。</p> <p>f. 成績処理に時間がかかる。</p> <p>g. 一人の先生に対する生徒の人数が多い。</p>	<p>l. 試験の有無などの統一を明確化する。</p> <p>m. 成績が分かり次第、なるべく早く開示する。</p> <p>n. 早めの成績開示スケジュールを組む。</p> <p>o. 先生の人数を増やす。または生徒を減らす。</p>	
30-対. 歯学部	<p>a. 大学での学びが試験のための勉強になってしまっている。</p> <p>b. 対面授業とオンライン授業が混在している日がある。</p> <p>c. テストのフィードバックが弱い。</p> <p>d. 成績開示が遅すぎる。</p> <p>e. 充電できる場所が少なすぎる。</p> <p>f. 意見をいえる機会が少ない。</p>	<p>g. 講義に臨床系の内容も取り入れる。</p> <p>h. 対面授業とオンライン授業の日程を分ける。</p> <p>i. 答案返却・全ての授業での答案解説・平均点や順位の開示を行う。</p> <p>j. 教員側の成績提出期限を早める。</p> <p>k. 使えるコンセントを増やす。</p> <p>l. 随時意見を言える意見箱を作る。</p>	m. 特になし。
31-対. 生物資源科学部	<p>a. Wi-Fiが無いところがある。 ⇒電子資料が多いため、Wi-Fiがないと不便である。</p> <p>b. 学費が高い。 ⇒金額の根拠が欲しい。</p> <p>c. オンラインの授業時間が違う。 ⇒先生間での情報共有不足。</p> <p>d. オンライン・対面の両立をしてほしい。</p> <p>e. レポートの採点基準が曖昧。 ⇒先生のマインドが古い</p> <p>f. 外部の先生が必修の授業を持っている。 ⇒単位を落としてしまったときに先生に聞きづらい</p> <p>g. オンライン方式に慣れてほしい。 ⇒数年経ったので、慣れてほしい。学生側のことを理解してほしい。</p>	<p>i. 以前は前期に後期の分まで履修登録ができ、後期にももう一度履修登録ができた。今は出来ないの、出来るようにしてほしい。</p> <p>j. グループディスカッションなどを利用した授業が少ない。</p> <p>k. 以前はできていたのに、現在では同じ時間に二重履修ができないのでできるようにしてほしい。</p> <p>l. 学科ごとの自習室が欲しい。</p> <p>m. 研究室の人数を減らす。</p> <p>n. 対面の実習を増やしてほしい。</p> <p>o. コピーが有料な点。受講するにあたって、コピー等必要なものの有料は学生の負担が大きい。</p> <p>p. すべての場所にWi-Fiを設置してほしい。</p> <p>q. いろんな施設があるのに活かしきれてない。</p>	<p>x. 他学部との交流が少ない。</p> <p>y. 留学の機会、制度が少ない。</p> <p>z. 学生がオフィシャルで大学へ意見する機会を増やしてほしい。</p> <p>1. 学部間の長期的な交流が少ない。</p> <p>2. OB・OGとの関わりを増やしたい。</p> <p>3. コロナ禍でレジュメが増えたので、大学内で一定量のコピーを無料にしてほしい。</p> <p>4. パソコンを使い慣れていない教員が未だ多いので、教職員に対しての指導をして欲しい。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>h. 授業のやり方を学ぶ機会がなく、教員任せになっている。 ⇒授業のやり方に悩んでいる先生にアドバイスできるようにしたい。または、やり方を明文化してほしい。</p>	<p>r. 気軽に入れる自習室が欲しい。 s. 授業に人数制限があるため、班で分けた場合に授業時間自体が減ること。 t. 先生や科目によって配信される授業時間や課題の量の差が大きいこと。 u. 他学科や他学年と交流する機会が少ないこと。 v. 授業に間に合わないので昼食を食べられる席数を増やして欲しい。値段も下げてほしい。 w. 各科目で、内容・講義方法・採点方法・採点基準について公表して透明性を高め、改善しやすくする。</p>	
32-対. 薬学部	<p>a. 電子化による充電環境の設備不足。 b. 小テストの閲覧制限や期間制限の改善。 c. 他学部との交流が少ない。 d. 各科目の学目的の明確化。 e. レジユメなどのコピー代で費用がかさむ。</p>	<p>f. Imsを使用した小テストや課題が多く、iPad やパソコンを使用する頻度が高くなっているため、5号館や8号館など講義でよく使用する場所に充電設備を作ってほしい。 g. フィードバックの徹底。 h. 教員側から学ぶ目的について話してほしい。 i. 危機管理学部のように、一年につき何枚までのように無料でコピーできるポイント（コピーポイント制度）を導入してほしい。</p>	<p>k. 薬学部はキャンパスが独立しており、他学部の学生との関わりがほとんどないので、医療関係学部での連携（オンラインでの他学部講義受講など）できるようにしてほしい。</p>
33-対. 通信教育部	<p>a. 学習方法が多様で時期も重なるため、ガイダンスを受けても理解ができない学生が存在し、そのままになってしまっている。 b. 教材や授業内の例、メディア授業の映像が古い。 c. スクーリングの授業数が少ない。メディア授業の質が低い。メディア授業がオンデマンド授業の受け皿になれていない。</p>	<p>d. 大学生のため何が理解できていないのかまでは自分で考える。日大通信はスクーリングがメインのためスクーリングを軸に履修すると良い。 e. 定期的に見直す年を作ったり、他の先生の授業を参考にする。学部として授業の質をより良くする。 f. 学修時間や学習場所に制限があること、環境・ニーズを意識した上で、授業作りをしてもらう。遠隔授業やハイブリッド授業の開催。</p>	<p>g. CHAmmiTのようなイベントを通年開催する。</p>

3. 参加者アンケート分析

本節では、当日実施したアンケートをもとに、「令和4年度 学生FD CHAmmiT」について参加者の視点から考察する。

まず CHAmmiT の認知度に関する設問を分析していく。

表1-1 今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
一昨年度	89	48.0%	82	52.0%
昨年度	93	54.4%	78	45.6%
今年度	97	52.2%	89	47.8%

出所 筆者作成

表1-2 今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
一昨年度	73	42.7%	98	57.3%
昨年度	84	49.1%	87	50.9%
今年度	103	55.4%	83	44.6%

出所 筆者作成

表1-1と表1-2は「FD」と「学生FD」の認知度について昨年度、一昨年度のCHAmmiTアンケートの結果と比較したものである。

まず、表1-1からイベント参加者の「FD」についての認知度は昨年度と比べて今年度は2.2%減少していることがわかる。他方、表1-2より「学生FD」についての認知度は昨年度と比べて6.3%上昇している。また、今年度参加者のFDの認知度と学生FDの認知度は例年と逆転している。

以上の結果から、学生FDの知名度がFDよりも上がったといえる。文理学部や理工学部などでは、学部ごとの学生FDが設置されているため、認知されるきっかけが増えている可能性がある。「『CHAmmiT』をどこで知りましたか？」という設問では、76.3%が「教職員からの紹介」、8.6%が「友人・先輩・後輩からの紹介」と回答しており、大部分の参加者が人からの紹介がきっかけでCHAmmiTを知っていることがわかった。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

表2-1 「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」は全般的に楽しめましたか？

	非常に楽しい		楽しい		普通		あまり楽しくない		つまらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	55	32.2%	76	44.4%	30	17.5%	6	3.5%	4	2.3%
昨年度	61	35.7%	87	50.9%	19	11.1%	2	1.2%	2	1.2%
今年度	73	39.2%	89	47.8%	22	11.8%	2	1.1%	0	0%

出所 筆者作成

表2-2 「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」を通じて、「学生FD」について理解を深めることはできましたか？

	理解できた		概ね理解できた		少し理解できた		理解できない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	101	59.1%	58	33.9%	12	7%	0	0%
昨年度	101	59.1%	63	36.8%	7	4.1%	0	0%
今年度	113	60.8%	64	34.4%	9	4.8%	0	0%

出所 筆者作成

表2-3 「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？また、その理由は何ですか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
一昨年度	148	86.5%	23	13.5%
昨年度	161	94.2%	10	5.8%
今年度	175	94.1%	11	5.9%

出所 筆者作成

表2-4 「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」を通じて、学生に戻り、「学生FD」について何か行動を起こしたいと思いませんか？

	必ず何かしたい		機会があればしたい		学生FD組織があれば関わりたい		思わない		わからない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	21	12.3%	85	49.7%	16	9.4%	21	12.3%	28	16.4%
昨年度	33	19.3%	94	55.0%	15	8.8%	12	7.0%	17	9.9%
今年度	34	18.3%	108	58.1%	15	8.1%	9	4.8%	20	10.8%

出所 筆者作成

表2-5 「学生FD」は、日本大学の教育（授業）改善につながると感じますか？

	大いにつながる		つながる		少しはつながる		つながらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	63	36.8%	68	39.8%	36	21.1%	4	2.3%
昨年度	84	49.1%	60	35.1%	25	14.6%	2	1.2%
今年度	92	49.5%	75	40.3%	17	9.1%	2	1.1%

出所 筆者作成

表2-1から、「非常に楽しい」という回答は昨年度から3.5%増加した。「つまらない」と回答した参加者はいなかった。さらに、「非常に楽しい」又は「楽しい」という回答が87.0%あり、総じて満足度が高くなっていることが分かる。

表2-2では、「理解できた」、「概ね理解できた」という回答が、95.2%を占めている。よって、CHAmmiTは参加者が学生FDについての理解を深めるためには良い効果があったといえる。

表2-3から、「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと感じた参加者が94.1%いることが分かった。CHAmmiT参加者の満足度が高いことが推測できる。

表2-4を考察する。この表では、学生FD活動について「必ず行動を起こしたい」、「機会があれば起こしたい」と回答した参加者は、昨年度よりも2.3%増加し、76.4%を占めていた。「思わない」という回答は、昨年度よりも2.2%減少し、今年度CHAmmiTが学生FDの契機となり、参加者の意欲を高めることが出来たといえるだろう。

最後に表2-5を考察する。「学生FD」が、日本大学の教育改善に「大いにつながる」、「つながる」と回答した参加者は89.8%であった。このことから、ほとんどの参加者が学生FDの教育改善への有効性を実感していることが推測できる。

以上の結果から、今年度CHAmmiTが多く参加者にとって有益な経験になったことが推測できる。また、CHAmmiTが参加者の学生FDへの理解を促進し、意欲を駆り立てることに繋がったと考えられる。

表3-1 次年度もこのようなイベントが開催されるとしたら、参加したいですか？

	何があっても参加したい		声がかかれば参加したい		あまり参加したくない		参加したくない		企画側として参加したい	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	20	11.7%	124	72.5%	16	9.4%	4	2.3%	7	4.1%
昨年度	18	10.5%	128	74.9%	12	7.0%	7	4.1%	6	3.5%
今年度	33	17.7%	139	74.7%	9	4.8%	3	1.6%	2	1.1%

出所 筆者作成

表3-2 今年度はハイブリッド開催でしたが、今後も完全対面に戻すのではなく、オンラインも併用した形式での学生交流等のイベントはあったほうが良いですか？

オンラインも併用してほしい		対面のみで良い		オンラインのみで良い		コロナの状況		オンラインと対面を別会場という形で同時開催する	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
130	69.9%	50	26.9%	4	2.2%	1	0.5%	1	0.5%

出所 筆者作成

表3-1から、「何があっても参加したい」と回答した参加者は17.7%おり、例年より約6%高かった。「あまり参加したくない」、「参加したくない」という意見は昨年度より4.7%低い6.4%となっており、総じてイベントに前向きな意見が増えたと言える。

次に、表3-2では「オンラインも併用してほしい」と回答した人が最も多く、全体の69.9%を占めていた。「対面のみで良い」という回答が26.9%だった。一方、「オンラインのみで良い」という回答は全体の26.9%であった。参加者の対面開催へのニーズの高さが読み取れる。

以上より、参加者は継続して次年度以降もCHAmmiTに参加する意欲が高いことがわかった。また、開催方法については対面参加のニーズの高さが窺える一方、オンラインを併用することでより参加者のニーズに見合うのではないかと考えられる。

4. 学生コアスタッフからの所感等

「教育改善に向けて」 土屋怜王

(日本大学経済学部経済学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ キャプテン)

はじめに、「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」を開催するにあたり、ご協力いただいた日本大学FD推進センターをはじめとした教職員並びに学生スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。

昨年度に引き続きコアスタッフとして携わらせていただいた。去年の経験を活かし、下の学年のスタッフのサポートをしたいと考えて参加した。また、個人的な目標をもって活動していた。それは、スタッフの継続率維持である。日本大学のFDは、日本大学での教育を、教員、職員、学生が協働してより良くしていくための活動を行っている。そして、CHAmmiTは、異なる学部の学生、教員、職員が集まって日ごろの大学での教育について話し合うイベントである。ここで上がった意見をもとに、各学部での教育改善につながる施策を検討することになる。しかし、CHAmmiTで話したことが、イベント後に参加者の記憶からなくなってしまうことがとてももったいないと感じていた。学生スタッフを継続することで、前年度よりもより良い案が思いついたり、大学教育について理解が深まったりと様々なメリットがある。そのため、スタッフに継続してもらえよう活動にしたいと考えていた。また、今年度は昨年度スタッフ経験者が19名おり、全体の約4割を占めていた。これは、様々な要因が考えられるが、昨年度のスタッフの熱心な努力があったからだと考えている。この継続力を次年度にも引き継ぎたいという思いで今年度のCHAmmiTに取り組んだ。

今年度の学生スタッフ参加者は、昨年度より11名少ない48名だった。昨年度以前は、多くの学部でオンライン方式の授業が行われており、学部内での学生同士の交流や対面でのコミュニケーションが少なかった。そのため、対面であるオフラインの関係を求めて参加した学生も多かっただろう。しかし、今年度は対面授

業への移行が進んでおり、学生間の交流がコロナ禍前に戻るため、次年度のスタッフの減少が見込まれる。したがって、スタッフを継続してもらうためにいくつかの取り組みを行った。

そのための課題を大きく3つに分けて考えた。1つ目は、学生スタッフの活動内容が煩雑であることだ。学生スタッフはイベント当日に時間内にファシリテーションをして、グループの意見をまとめなければならない。各セッションは、誘導問題のように一つひとつつながっている。まずは、セッション毎で話し合っほしい内容の意見を抽出する練習をする必要があった。そのため、コアスタッフでファシリテーションの説明書を用意し、本番を想定したファシリテーション練習会を企画した。そこで、スタッフに当日のデモンストラーションをしてもらった。

2つ目は、CHAmmiTの仲間との交流機会が少ないことだ。この課題に対して、特に私の所属する経済学部では、ファシリテーションの練習会を経済学部限定で開催した。学部内での親睦を深めつつ、当日のイメージをつかんでもらった。

3つ目は、コアスタッフそれぞれの予定がなかなか合わず、作業が滞ってしまうことだ。コアスタッフは、皆掛け持ちで様々な活動をしており、それぞれが学業、就職活動、アルバイト、他の団体での活動などを同時進行で行っている。そのため、スムーズに作業をすることができないことがあった。これに対しては、有効な手立てを講じることができず、来年度以降対策を講じる必要がある。

次に、CHAmmiT当日について振り返る。今年度は、「あなたにとって大学とは、何ですか?」というテーマを設定した。大学に通う目的を再確認し、大学に求めているものを洗い出してもらうことで、今の日本大学へのニーズを分析しつつ教育改善につながるアイデアを考えてもらうことを目的としている。セッション1は、学部混合で実施し、参加者それぞれの大学に通う目的について意見交換をした。セッション2では、授業を受ける中で感じる大学に満足していることと不満なことを洗い出した。セッション3では、セッション1・2を踏まえたうえで、大学の改善策をまとめた。以上の流れで、学部提案書の作成を行ったが、学部提案書を作るうえで反省点があった。セッション1で取り上げた「大学に通う目的」について、その学部が特定の専門性を持っていない場合、意見が出にくくなったと考えられる。そのような学部は、セッション2以降でアイデアが抽象的になっていた可能性がある。また、それが各グループ間の意見の量の差につながったと思う。来年度は、このように学部ごとの意見の量に差が出ないようにさらなる工夫が必要と考えられる。

最後に、今年度の活動を通して様々な点で成長を実感することがあった。CHAmmiTは、他学部が集まって一つの活動をする場であるため、スタッフ同士で考え方の違いに新鮮さを感じつつ、それを楽しみながらコアスタッフとして従事させていただいた。大学生は、活動領域が高校に比べて格段に広がる。そのため、大学での授業は優先順位が低くなりがちである。私たち学生は、大学に入った理由を忘れずに日々の授業に真摯に臨むことが大学の教育の一助になると考えている。

「コアスタッフとしてのCHAmmiTを経験して」 田中花奈

(日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科2年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ キャプテン)

私は、昨年度のCHAmmiTには学生スタッフとして、今年度は初めてコアスタッフとして活動に参加した。昨年度は、入学して間も無かったが自分の思い描いていた大学教育とは異なると感じ、何か自分にできることはないかと考え、学生スタッフの役割にある当日のファシリテーターとして学部提案書の作成に大きく関与することにした。その経験から、今年度はCHAmmiTの企画・運営により深く関与していきたいと考え、コアスタッフとしての参加に至った。

今年は初めてのコアスタッフとしての活動となったが、キャプテンとして各部署の統括やミーティング日時の設定、学務課との連絡など全体を纏めるという活動に関わる経験をさせていただいた。しかし

CHAmmiT 経験者とはいえ、企画・運営順序や方法など右も左も分からない状態であったため、土屋キャプテンや他のコアスタッフには沢山助けられた。そのため実際はキャプテン補佐のような形になってしまったが、当日は、各教室を巡回して全体を統括し、スタッフはスムーズな運営と有意義な議論ができたので、今年度のCHAmmiTは成功であったと感じた。

反省点・改善点としては次の3点が挙げられる。

まず1点目は先程も述べたように、キャプテンとはいえ実際はキャプテン補佐のような形になってしまった点である。コアスタッフ内ではキャプテンが2人いたため、どちらかが連絡をするのか、どちらに連絡・相談をすれば良いのかが曖昧になってしまい、連携が取れにくかった。来年度以降はキャプテンと副キャプテンに分けることにより役割を明確化し、統制をとることでより円滑化するのではないかと考える。また、今回は5つの部署に分かれて活動を進めていたが、部署間の動き方や報告の方法など、伝達が難しい場面が何度も見られた。今年度は人数の面でコアスタッフがいくつもの部署を掛け持ちする事があったが、来年度以降は1つの部署に専念し、足りない部署には学生スタッフの協力を仰ぐ必要があると考える。これによってある程度限られたタスクに力を注ぐことができ、よりクオリティの高い案や成果物が各部署から上がって来るのではないかと考える。

2点目は、コアスタッフと学生スタッフとの間の距離感についてである。昨年度も学生スタッフからの意見としてよく挙がっていた、「コアスタッフと学生スタッフの間に溝があるように感じる」という意見が今年度もまだ解決しきれていないように感じた。チームビルディングの親睦会や企画、セクレタリーの議事録投稿は、スタッフ間の仲や意識を深めることに繋がっていたとも感じるが、コアスタッフ内でのミーティングや当日案が全て完成してから学生スタッフへの報告になるため、やはり学生スタッフはコアスタッフがどのような動きをしているのか不明瞭で溝を感じるのだと考える。来年度以降は学生スタッフからの意見も取り入れる機会を設けたり、コアスタッフのミーティングがどのように行われているかを見学する会などを設定し、親睦以外の点でも溝が埋められたら良いと考える。

3点目は、より教育改善にフォーカスしたCHAmmiTにしていくことについてである。毎回のミーティング後に挙がる反省点として、意見が学食や通信設備などの教育とは直結しないものが多くなってしまいう事がある。もっと早い段階から、ファシリテーターを務める学生スタッフには教育に繋がる意見を引き出すようアドバイスを行ったり、当日の参加者にはCHAmmiTが教育改善について話し合う場であるということによりインパクトのあるポスターや動画などの形にして伝えていったりする事で、当日はより有意義な意見が挙がってくるのではないかと考える。

最後に、学生スタッフや参加者の方々、関係者の皆様に深く御礼申し上げる。また、このような貴重な機会にコアスタッフとして参加させて頂いたことにも感謝する。今年度のCHAmmiTで全てが終了したものとはせずに、来年度以降のCHAmmiTへ繋げていきたい。

「今年度活動を振り返って」 中澤駿之介

(日本大学危機管理学部危機管理学科4年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント兼チームビルディング)

初めに、今年度CHAmmiTにスタッフとして関わってくれた学生の皆さん、参加して下さった学生・教職員の皆様、そして何度も連絡を繰り返し連携をできる限り密にしてくださった日本大学FD推進センターの皆様に変更して御礼申し上げたい。2013年から続くCHAmmiTの歴史の中で、初めて対面・オンラインのハイブリッド開催を乗り切れたのは、私一人の力ではなく、関わって頂いた皆様のおかげだと感じている。今年度のスタッフとして、活動に従事できたことを本当に誇りに思う。

新型コロナウイルスの影響により失われた学生生活を少しでも良い方向にしたいと考えて、私は今まで3

年間 CHAmmiT の活動に従事してきた。前年度までは一般スタッフとして参加者の意見を良い方向にブラッシュアップすることを経験した。付属中から10年間お世話になった日本大学に、ささやかながら恩返しをしたいと考えた。そこで今年度はコアスタッフとして、自ら CHAmmiT の企画を行った。

今年は初めてコアスタッフとして活動に参加し、CHAmmiT の内容を決定するマネジメントと、スタッフ同士のコミュニケーションの円滑化を図るチームビルディングという2チームの総括を行った。本来はスタッフ同士の親睦を深め、一般スタッフの皆様にお手伝いいただく CHAmmiT 当日の担当しゃべり場進行（以下ファシリテーター）のブラッシュアップを行うチームビルディングの総括のみの担当であった。CHAmmiT 当日の企画を行うに当たり、企画原案を出してみたところ採用されたためマネジメントの総括も行う運びとなったのである。

結論から先に述べてしまうと「反省点も多くあるが、私にできることはすべてやり切った」結果であったと考えている。マネジメントではファシリテーションマニュアルを作成し、CHAmmiT 当日の内容決定が主なタスクであった。一方、チームビルディングはスタッフの親睦を深めることが主であった。ギリギリまで修正を続けたマニュアルや、親睦会や忘年会を企画してくれる等、一般スタッフのおかげで、CHAmmiT 当日の満足度は8割近くが満足していると回答を頂いた。繰り返すようで申し訳ないが、これは私一人の力では成し遂げられなかった結果であると考えており、6月から今までの期間協力してくださった学生・教職員の皆様と一緒にだったからこそ成し遂げた結果だと思う。10年間の恩返し也十分に行えたと感じている。

最後に、CHAmmiT のすべてに関わっていただいたすべての皆様に心から御礼申し上げる。私の活動が、日本大学をより良い方向に一歩前進させることができたなら幸いである。

この組織・活動がこれからの日本大学の発展に繋がるよう期待を込め、締めくくりとする。

10年間、お世話になりました。

「CHAmmiT に参加して」 宮川美月

（日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科4年・学生FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント）

今年度、4年生ではじめてコアスタッフとして CHAmmiT の活動に参加した。参加した理由はとても単純であり、大学生最後の年に何かにチャレンジしたいと感じたからである。その中で学生 CHAmmiT のコアスタッフは、日本大学の学生である今しかできないことであり、さらに今まで関わることの少なかった他学部・他学科の学生と協力し、CHAmmiT 当日に向けて企画・運営をするという貴重な経験をすることができると考え、応募した次第である。

私は CHAmmiT においてミーティングや当日のテーマなどを決定し、ファシリテーションマニュアルの作成など、FD 全体を取り仕切るマネジメント、そして当日は対面参加者・オンライン参加者200人以上が参加する ZOOM のホストとしてオープニングやエンディングのサポート、各セッションのブレイクアウトルームの振り分けなどを行った。活動に対して難しさを感じる部分もあったが、とても満足した結果と良い経験になった。特に他学部・他学科の学生とミーティングなどを通して関係を築くうえで、今までの境遇や大切にしている価値観などの話を聴けたことで、私自身の今後を考えるきっかけとなった。

このように活動には大いに満足しているが、一つ課題が挙げられる。それはコアスタッフと学生スタッフの連携についてだ。事後ミーティングで運営に対する率直な感想を学生スタッフに出してもらったところ、「コアスタッフの情報が入ってこなくて、何をしたらいいのか分からない」や「重要な決定もコアスタッフのみで行ってしまうため、疎外感を感じる」という意見があった。学生スタッフも CHAmmiT を行う上で重要な役割を担っているため、来年度からは両者が活発に意見交換ができるような関係性になれば、よりスムーズな連携がとれるだろう。

最後に CHAmmiT に関わってくれた多くの学生、教職員の方々に御礼を申し上げます。今年度、大学生最

後の年にお世話になった日本大学に貢献することができ、とても光栄である。このような良い経験で得られたことを社会人になった時に活かせるよう、精進していきたい。これからも CHAmmiT の活動がより推進され、より良い日本大学になることを願っている。

「今年度の CHAmmiT に参加して」 大保航貴

(日本大学理工学部交通システム工学科 3 年・令和 4 年度 学生 FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント兼アート)

まず最初に、CHAmmiT に関わる全ての方に、厚く御礼を申し上げる。私の大学生活は未曾有の新型コロナウイルスから始まった。初めてのオンライン授業で友達もできず、不安の中での大学生活のスタートだった。何もかもに制限がつく生活が 2 年続き、やっと今年度から本格的に対面での大学生活がスタートした。2 年ぶりに毎日学校へ行き友達と一緒に切磋琢磨して授業や活動ができたことや、多くの新たな出会いと感激があったのは今でも忘れられない。しかし、社会の環境はこの 2 年で大きく変わり、対面が再開したからといって全てが戻ることはなかった。そんな時に出会ったのがこの CHAmmiT だった。

「集まった学生と共に自分たちのためにも大学のためにもお互いにより良い教育環境を整備していきたい。」そう思い、今までの様々な経験を活かし、残り 2 年間の大学生活を皆と共により良くしていこうと、コアスタッフへの参加を決心した。

今回、組織としてはマネジメントとアートを、当日はグループのファシリテーションを担当した。以前からファシリテーションをする機会は多く、8 割の準備が大切だと学んできた。CHAmmiT 当日を迎えるにあたり、数多くの会議と実践的なシミュレーションを重ねた。スタッフとして参加してくださる方々へのマニュアルを作成するなど、CHAmmiT ならではのものも多かった。ファシリテーションをするにあたって、自分自身でも多くの準備を重ねた。特に今回はオンライン参加のグループを担当することになり、対面参加者と差をつけずに進めていけるかが大きな課題だったと思う。自分自身でも今回のテーマについて深く何度も考え、事前に何度かスタッフ内でも本番想定で議論を重ねた。その中で、多種多様な意見が飛び交いまとめることに時間がかかることも想定された。いかにして、時間内で皆の意見をまとめ上げ、最終的な報告書にまとめ上げるか。今まであまり経験もないほどの意見が出ることに驚くとともに、この意見をまとめ伝えなければという使命も感じた。

CHAmmiT 当日を迎え、対面でもオンラインでも多くの方に参加していただき、議論ができた。結果的には、良い時間を作ることができたのではないと思うが、要所要所で準備不足な点も多く現れた。特に、オンラインにおける時間への制限が難しかった。対面であれば、休憩時間等の少しの時間でも話し続けることもでき、休憩時間等でも色々と意見交換は可能である。しかし、オンラインであると残り時間が 0 秒になれば終わってしまい、雑談等も比較的難しい。この対面とオンラインの差を埋めることは今後への反省点になると思う。話せる時間が制限される中で、参加者の意見を細やかにまとめることはできなかった。最終的には時間の制限によって聞けなかったこともあった。オンラインに関しての今後の反省点として、より時間にゆとりを持ち、可能であればできることは参加者にも事前に意見整理等をしてもらい、当日は議論のみにするなどの準備をお願いすることも必要になると思う。

最後に、CHAmmiT が終わり学部提案書ができ、改めて教育改善に終わりではなく、継続的に議論していくことの重要さを感じた。所属している理工学部は学生数も多く、それだけ多くの意見が出た。容易に改善できることと改善が難しいことはそれぞれあると思う。しかし、皆が協力して継続的に意見交換をしあい、時には妥協をしながらでも答えを作っていくことに、毎年学部提案書を作っていることに意味があると思う。来年度以降も、CHAmmiT をはじめとした FD 活動が続くことを、そして日本大学全体の教育活動がより良くなることを願い、締めさせていただきます。

「FD CHAmmiT で学んだことと今後の展望」 境野哲美

(日本大学理工学部まちづくり工学科 4年・令和4年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ チームビルディング)

私がFD CHAmmiTに参加しようと思った理由は、この3年間所属学科で学び、本来の大学の在り方と実際の大学の在り方や、教職員と学生の意識の差を感じたからだ。以前参加者側として参加したが、もっと長い期間、様々な学部の学生と関わりたいと思い学生コアスタッフとして参加した。

今回のFD CHAmmiTに参加したことで、他学部・他学科の学生から大学の学びに対する意見を聞くことができた。私や私の友人が感じている問題と同じ問題が様々な学部・学科でも起きていることが分かり、私の身の回りでは無かった問題点に気づくこともできた。

その中でも特に3つの点が今後の大学に重要だと思った。その3つとは、「教職員の質の差が大きいこと」、「学生間の交流が少ないこと」、「大学の有事の対応が遅いこと」だ。

教職員の質は今後の日本の質に関わる。教員が適切な教え方で分かりやすく楽しさも伝えながら、自ら学び、かつ考え、意見を共有しながら学生に学ぶ習慣を付けさせることができると、卒業後も様々な場面で活かすことが出来る。適切な知識と学び続ける姿勢、お互いの意見を聞きながら考える習慣を持つ人が増え、社会全体のレベルが上がる。そのために教える立場に立つ人の質を上げることが今後の大きな課題の一つになる。また、学びに関しては、大学が今の大学の在り方で良いのかという問題にも関係する。研究者が研究を行うための機関である大学だが、職に就くために大学に進学する人が多いのが現実で、教授と学生の間で意識のずれが生じる。学生に研究してほしいと考える教授と仕事に就くことを目的に学ぶ学生とでは、目指す姿が異なる。お互いにとって中途半端な教育の場ができてしまうことを実感した。専門学校や大学といった教育機関の在り方を見つめ直し、働きかけることが日本大学にも必要だと思う。

2つ目の学生間の交流の場の増加は、多くのことを学び視野を広げることや社会に出てからも色々な場所に繋がりを持ち人生の質を高めることに繋がる。コロナにより人との繋がりの重要性が再確認され、繋がりの機会を増やしたいと思う人が増えた今、交流の場の設定については、考え直すことが重要になるのではないか。まずは思いつく方法や今回参加者が提案してくれた方法を試してみたい。試行錯誤しながら、最終的には学生が自ら動き、誰もがそこにアクセスできる状態にするのが望ましい。また、私が学んでいるまちづくりの計画・設計でも人の繋がりを考える必要があると思う。FD CHAmmiTで大学の現状を知ることによって特に学生の生活に着目した計画・設計について考えることができた。また、交流は、同じ学校の学生間だけでなく、他の環境にいる人や様々な世代の人との交流も重要になる。学外との繋がりも持たせられる場の創出をいかに実現していくかも考えていきたい。

大学の有事の対応が遅いことはコロナによって明らかになったように思う。対応の遅さは学生の時間を奪ってしまうことになる。問題が明らかになったのはとても良いことなので今後は見直して行ってほしい。学生の意見をよく聞き学生の立場にも立ちながら、外部の専門家も交えて、必要に応じて社会に働きかけ、様々な大学と協力して進めることが重要だと思う。

準備・運営に携わることで気づいたこと・学んだことも多かった。今までイベントの運営側として携わったことがなかったが、今回の経験により、1日間のイベントの準備・運営を行うことの大変さを肌で感じる事ができた。また、準備を行って行く中で、一人一人の行動やチーム全体での動き方が重要になることを感じた。

特に4つの重要性を体感できた。「携わってくれている全員がその時の進捗状況を把握すること」、「多くの人にやる気を持ってもらうこと」、「活動する中で常に意見を言える場と雰囲気を作ること」、「スケジュールは早めに設定し仕事も早く終わらせておくこと」だ。そのためには、個人に合った内容で適切な量の仕事を全員に割り振ること、一人もしくは一部のメンバーで全て解決しようとせず、意見を聞いたり困っている

ことを伝えたりすること、やること全てを最初に考えてスケジュールを組み、全員に伝えることが必要だと分かった。言葉にすれば当たり前前に感じるものも、実際に大人数で行動してみると難しい。一人一人の性格・特徴を理解し、一つ一つ解決することも大切だ。これらは組織が大きくなればなるほど難しくなるが、今後は常に運営方法について考えて行動し今後に活かしたい。

運営を成功させるにはチームメイトの仲も重要になる。私は、スタッフの仲を深めるポジションであるチームビルディングのスタッフとして活動した。しかし実際に仲を深めるイベントを企画しても人が集まらず、全体をまとめたり魅力的で参加可能な企画を考えたりすることの難しさを学んだ。今後は、企画力・プレゼン力、ニーズを把握する力などを高めていきたい。

「セクレタリーとアートから見た今年度の CHAmmit」 本橋侑也

(日本大学工学部精密機械工学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmit コアスタッフ セクレタリー兼アート)

約半年以上に渡り準備し続けてきた「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmit」が令和4年10月16日に開催された。私は昨年度、一般の参加者として参加したが、今年度は初めてコアスタッフとしてセクレタリーとアートを担当させて頂いた。初めてスタッフとして企画運営に携わらせて頂くにあたり、右も左も分からなかった私に対し、様々なご指摘を下された関係者の皆様、当日 CHAmmit に参加して下さった参加者の皆様に対し、深く御礼を申し上げる。

私は今回の CHAmmit でセクレタリーとアートの役職を兼務させて頂く事になった。そこで私からは、2つの役割で関わった CHAmmit について述べていきたい。

まずセクレタリーについて述べていく。セクレタリーでは、主に議事録と報告書の作成を行った。最初に誰がどのミーティングを担当するかを皆である程度決めておいたおかげで、当日慌てて誰が担当するかを考えずに済んだのは良かったと思う。素早く資料作成が行え、完成後すぐにスタッフ全体に共有できた。その為、欠席者やオンライン参加者等も共通した認識が持てたと思う。

一方で、反省点は2つある。まず1つ目は、外部にも公開する報告書が昨年とほぼ同じ様な構成になってしまった事である。テーマから細かな内容に至るまで、何もかもが昨年とは異なる CHAmmit であるにも拘らず、文章構成はおろか、イメージとして使用している画像でさえ、昨年度の物と全く同じになってしまった部分がある事は、反省・改善すべき事項ではないかと考える。外部から見られた時の事をより意識し、他の部署ともできる限り連携しながら作成すれば、報告書の注目度も上がるのではないだろうかと考える。

続いて2つ目の反省点は、本番が近づくに連れて、私のもう1つの担当であるアートの仕事が忙しくなり、中々セクレタリーの仕事に注力する事ができなかった事である。複数の担当を兼務するにあたり、予期せぬ問題が生じた際に於ける仕事への影響を考慮せずにスケジュールを組んでしまった為、最後の方は、かなり他のメンバーに任せ切りになってしまった。もう少しバランスを考えて仕事に取り組むべきだったと思う。

次にアートについて述べていく。アートでは、主にポスターとスタッフ用 T シャツのデザインを手掛けた。いずれもスタッフ内から出た意見を基に、イラスト制作を得意としているスタッフ以外の日大生にボランティアを依頼した事から、完成度の高いデザインとなった。ただデザインを作るだけではなく、「文字を円状に並べる事で協力や団結を表現」「白衣を着たアカデミックな学生・スーツを着たビジネスの学生・考える学生の3人を並べる事で今年のテーマを表現」という具合に、それぞれのデザインに意味を持たせ、参加者募集用と当日掲示用の2種類のポスターを制作した事で、今年度の CHAmmit がイメージし易くなったと思う。更に、制作したポスターはインフルエンサーと連携して SNS での拡散に活用させた事で、全学的な参加者の増加に繋がったと考える。

当然、反省点も存在する。その反省点は多数存在するが、ここでは特に重要度の高い2つの問題について

取り上げたい。まず1つ目の問題は、学務課や印刷業者との連携が上手く取れず、A2サイズのポスターを各学部に配布できなかった事である。今回はパワーポイントを使って作成したポスターのデザインを、互換性の問題に配慮してPDFファイルに変換して学務課に提出し、印刷業者に発注を掛ける形を取った。しかし、印刷業者から学務課を通して印刷できないとの回答があった。結局、「各学部が持つ印刷環境の違いから、各学部に印刷を任せたくない。」との話があったにも拘らず、学務課からデータを送信し、各学部で印刷して頂く事になってしまった。その結果、学部毎に印刷枚数やサイズが異なってしまい、中には掲示が全く無い学部まで出てきてしまった。掲示の無い学部に対しては、改めて学務課より連絡して頂き、且つ学生スタッフから各学部の教務課に掲示のお願いをする対応を取ったが、結果的に学務課及び学生スタッフの負担を増やしてしまう事になってしまった。この問題に対する改善策としては、まず印刷業者に印刷を断られない様にする為、予め印刷できる条件（ファイル形式等）を印刷業者に直接確認を取った上で、デザインの制作に取り掛かる様にすれば良かったと考える。また、毎年印刷を頼んでいる業者は同じだと聞いたので、迅速に対応できる様にする為、マニュアルを作成したり、アートのメンバーに最低でも1人は経験者を入れる様にしたりして対策を施す事で、再発防止に努めるべきだと考える。

続いて2つ目の問題は、アートのメンバーが一体となって活動できなかった事である。今年のアートは1人も経験者が居なかった為、誰も昨年度の活動の流れを知らない状態で活動が始まってしまった。そこで、元スタッフでアートを担当していた人を交えたミーティングを企画し、活動の流れや注意事項等を共有した。その結果、活動を本格的に始めるまでに時間が掛かってしまい、忙しさもあってかメンバーの気持ちが次第に離れてしまった。時間が無かった為、中々活動に参加しないメンバーを殆ど無視する様な形で作業を先に進めてしまい、更について行けない状態を作ってしまった。この問題に対する改善策も先程と同様に、マニュアルを作成したり、アートのメンバーに最低でも1人は経験者を入れたりする事で改善できると考える。また、こまめにコミュニケーションを取る事、具体的にはアート内だけでも定期的なミーティングを、5分間だけでも良いので設ける事が重要なのではないだろうかと考える。こうする事で、お互いの状況を理解した上で活動できる様になるので、余裕のある人が余裕の無い人に対して手を差し伸べる事ができ、もう少し活動全体に余裕ができたと考えられる。

成功と課題が混在するCHAmmiTとなってしまったが、無事に終了できて良かったと感じる。最後に改めて、関係者の皆様へ、深く御礼を申し上げる。この様な全学的なイベントに、企画運営の立場からコアスタッフとして携われた事をととても誇りに思う。しかし、今年度のCHAmmiTは決してゴールではなく、更なる可能性と改善の余地があると考えられる。来年度以降の学生FD活動の更なる発展を期待しつつ、筆を置かせて頂く。

「コアスタッフでのCHAmmiT」 渡 祐太

(日本大学工学部情報工学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ・セクレタリー)

まず、今年の日本大学学生FD CHAmmiT（以下、CHAmmiTとする。）の開催につき、ご尽力頂いた教職員の方々、学生スタッフ、参加者を含めたその他の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。まだまだ新型コロナウイルス感染症の流行する中で対面とオンラインのハイブリットで開催できたのは皆様のお力添えの賜物であると感じている。

今年度のCHAmmiTの感想だが、とても満足できるものであったと感じている。昨年度と活動において大きく異なるのは、対面を希望した参加者の方は通信教育部まで来て、しゃべり場に参加することであった。多くの人が初めてとなる対面でのCHAmmiTであったと思うが、大きなトラブルもなく進行できたことは入念なファシリテーションマニュアルの読み合わせの成果もあるだろう。加えて全5回の全体ミーティングも効果的に働いたと感じている。

次に私自身のCHAmmiTまでの活動について触れる。セクレタリーとして、本活動の書記に当たる活動を担当させていただいた。全体ミーティングの内容を議事録にまとめ、いち早く共有、そしてその後報告書にまとめてウェブサイトなどへの掲載を行った。CHAmmiT本番では対面グループのファシリテーター兼zoomの入出管理を担当した。生産工学部のファシリテーターとして、同じブースのスタッフとともに協力して円滑な運営ができたと感じている。参加者もとても魅力的な意見を多く出してくれ、とても意味のあるしゃべり場にする事ができた。

反省としては、学生スタッフとの連携が挙げられる。私は昨年も学生スタッフであるため感じていたが、コアスタッフがどのように動いているのか学生スタッフにはわかりにくいのではと思うことが多くあった。一部を除いて学生スタッフは第二の参加者のような形で、コアスタッフが学生スタッフをゲストであるかのような対応になっていたと感じた。スタッフ一丸で頑張っていたと思うが、しかしながらその間に多少の溝はあったように思う。セクレタリーでコアスタッフでの話し合いも議事録にし、その時のプロジェクトの進行具合を共有することができれば、学生スタッフとの共通理解をさらに図ることができていたと思う。新型コロナウイルス感染症の影響が収まれば、近くの学部のスタッフ同士で集まって議論、交流を行うことができ、連携することでよい効果が見込めると思う。これらは来年のCHAmmiTの課題となりえるだろう。

私は2年生までの2年間、新型コロナウイルス感染症の影響で大学生としての活動が少なく、他学部との交流や意見交換の場として、昨年度に学生スタッフとして、CHAmmiTに関わらせていただいた。あまり対面でのミーティングに参加することはできていなかったが、それでも多くのスタッフと話し、活動し、協力してCHAmmiTを完成させた。その際、この活動に関わる人はそれぞれ大学を良いものになりたいというエネルギーと責任感があると感じ、それは私にとってとても刺激的であった。今年は、そのやる気にあふれる刺激をもっと受けたいという思いと、さらに深く活動に関わりたいと考えて、コアスタッフへと志願した。私は工学部のため、対面でのコアスタッフでの集まりへの参加が厳しく、関わりが少なくなってしまった点はとても残念であるが、その分セクレタリーにて議事録作成に注力し、加えて対面ミーティングや本番やその後の振り返りの時には協力して運営できたと感じている。大きなプロジェクトを担う一員になるということと、締め切りや自身に任せられた仕事をこなすという責任感を理解することができたCHAmmiTであった。

来年以降も教職員の方々と学生との意見共有の場、そして教育改善の発信地となり続けるよう心から願っている。

「2回目のCHAmmiTをやってみて」 柴田大輝

(日本大学生物資源科学部生命化学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント)

去年に引き続いて日本大学FD CHAmmiTに関わらせて頂いた。そのことに関する感想と反省の2点を記していく。先んじて経緯としては、去年やってみて経験や人とのつながりを得られるなど、大変有意義な時間を過ごすことが出来た。その事から、今年も引き続きコアスタッフに携わることに決めた。今年度は、コロナウイルスにより大学が変化していき、今年はコロナ禍というよりは、アフターコロナという状況下でのスタートとなった。2年目ということもあり、多少の慣れと、前回とは少し異なるメンバーとの緊張を持ちながら、対面とオンラインとのハイブリット形式での実施で多くの困難やトラブルを越えながら本番を迎えることが出来た。

感想としては、結果として良いものになったのではないと思う。過程がどうであれ、対面実施を経験したことが無いメンバーがほとんどの中、きちんと形にできたことは誇るべきだと考える。多少のトラブルがあったとしてもそれは、外れ値であり、事前に防ぐ事は難しいと思われる。しかし、反省点もいくつか挙げられる。まず、本番についてだが、今年度のコアスタッフは12名で一般スタッフは約30名弱で去年より少ないのに対して、参加者が対面、オンライン含めて、去年よりも多い参加者となった。今年度は去年度と異

なり、対面も含めた実施なので、余計に人手が足りないという事態となった。また、対面でのトラブル対応マニュアルなどがあるとより迅速に対応できたように感じる。来年度以降この経験を活かしてもらえることを期待している。

次に普段の活動だが、今年度もタスクを細分化し効率よく運営していくために、コアスタッフ内で役割分担し5つの部署に分かれて活動していく形となった。しかし、やはりそれぞれの部署間での考え、やり方、報連相などの意思疎通が難しい場面などが見られた。これを改善出来れば、ダブルブッキングを防ぎ、ほかのことに時間を回せ、効率的にタスクを消化できたのではないかと思案する。対策としては、各部署に必ずリーダーを配置させ、樹形図的に仕事を上から下に、完成物を下から上にといった運営をした方が効率的だと考える。また、コアスタッフのリーダーは二人ではなく、リーダーと副リーダーに完全に分けた方が周りとしてもやりやすいのではないかと考える。これに付随して、各部署のスタッフは他の部署と協力しつつも、自分の部署のみに専念させてみるのも良いと考える。そして、もし人手が足りないのならば一般スタッフも必ずどこかの部署に所属させる等の対応により、予てからの懸念点であった学生スタッフ等の途中辞退なども責任感を与えることで、減らせられると考える。

最後に認知度である。学生FD CHAmmitの認知度が低いことによって学部からの推薦によるスタッフ、及び、参加者は何を行う団体なのか、どのくらいの期間活動をするか何も不明なまま参加しているように感じる。そのためには先ず、CHAmmitがどのような活動で、どのくらいの期間にするなどの5W1Hの説明やスタッフ募集、参加者募集などを教職員にしっかりの理解してもらい、その上で推薦や参加をしていただくとより良いものになると確信している。それに伴い、ポスターやTシャツのデザインは早いうちから芸術学部の絵画系の学生か絵の得意な人をお願いしておくことで、本番までの長期期間宣伝することが出来ると考える。そういったことを改善することで、このような活動に興味はあるが迷っている学生、未だ存在を知らない学生を発掘できたかもしれないことを思うと実に惜しく感じる。

今年度も学生FD CHAmmitという活動が自分に与えた影響は大きく、学生生活においても大変有意義な経験を得られたように思う。また、コロナウイルスによって変わらざるを得ない大学の行く末に今年も関わることが出来光栄に思う。教員、職員、学生が参画し大学教育を変えるという貴重な機会だからこそ、例え難しくとも良い活動になるように来年度のスタッフにはこれらの反省を活かしつつ、その年にあったやり方を模索し、更に良いものに仕上げしてほしい。日本大学の教育が少しずつでも発展し、学生も教職員の方たちも前を向く事が出来ることを心から願っている。

「インフルエンサーとして」 曾山はるか

(日本大学生物資源科学部動物資源科学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmit コアスタッフ インフルエンサー)

初めに、今年度CHAmmitにスタッフとして関わってくださった学生のスタッフ、参加してくださった学生・教職員の皆様、そして日本大学FD推進センターの皆様に変更して御礼申し上げたい。日本大学学生FD史上初のハイブリッド方式で開催し、成功出来たのは、関わって頂いた皆様のおかげだと感じている。今年度のスタッフとして、活動に従事できたことを本当に誇りに思う。

さて、私は今年度の日本大学 学生FD CHAmmitのインフルエンサー活動の反省を述べようと思う。

まず、公式アカウントのフォロワー数を増やすことが出来なかったことが、反省点として挙げられる。特にInstagramのフォロワーは、目標としていた100人には届かず、90人という結果だった。しかも内訳を見てみると、フォロワーはほぼ今年のスタッフか、OB・OGの方たちばかりで、ターゲットとしているスタッフでない日本大学生のフォロワーはほぼいないことがわかった。これは、投稿が同じような内容になってしまったことが原因だと考えられる。日本大学の公式アカウントなのでFD活動に関係のない投稿は

できないことはもちろんだが、投稿内容がミーティングの報告ばかりになってしまい、投稿を見る人に「また同じ内容か」「投稿内容が固いな」という印象を与えてしまったことが考えられる。実際、学生スタッフからもそのような指摘があったが、本番間近ということもあり、投稿内容を変えることは出来なかった。

次に、新しい投稿をするのが遅くなったことが反省点として挙げられる。今年度のインフルエンサーの新しい取り組みとして「グリット投稿」と「所属している学科の紹介」の2つを行った。しかし、どちらも投稿するのが本番近くとなり、結果的にフォロワー増加に繋げることが出来なかった。これは、インフルエンサーのリーダーである私の体調管理が出来ておらず、インフルエンサーのグループを動かすのが遅くなったことが原因である。仲間に頼ることをせず、自分1人で解決しようとしていた節があり、個人的に猛反省している。しかし投稿自体はこれまでの公式アカウントにはないもので、日本大学のFD活動に新しい風を吹かせられたと思う。グリット投稿は、公式インスタグラムを見たときにパッと目を引くものでインパクトが強く、フォロワーに新鮮さをもたらすことが出来た。所属している学科の紹介は、インフルエンサーが所属している「学科」の紹介をした。学部を紹介はよく目にするが、学科の紹介はあまり見る機会がなかったことから、自分の所属していない学科の特性を知ることができる良い機会になったと思う。グリット投稿も所属している学科の紹介も、質の高い投稿だったからこそ、もっと早く投稿出来ていれば、より多くの人の目に留まることが出来たのではないかと考えている。

最後に、コアスタッフと学生スタッフとの間に壁があったことが反省点として挙げられる。これはインフルエンサー活動に限らず、今年度のFD活動全体に言えることだが、問題点などの解決を全てコアスタッフのみで行い、学生スタッフには報告しか出来なかった。しかも何度も報告することが変わるため、学生スタッフを混乱させてしまったと思う。解決策としては、問題が起きた時や新たな課題が出てきた時に、学生スタッフの意見を聞く機会を作ったり、過程をしっかりと説明する機会を作ることが考えられる。

反省点は多いが、今年度も学生FD CHAmmiTという活動を通して自分自身成長できたと思う。また、コロナウイルスによって日々変化していく世の中の中の大学という機関に関わることが出来光栄に思う。教員、職員、学生の三者が同じ目標である大学教育を変えるということに取り組む貴重な機会だからこそ、困難なことが続いたとしても日本大学の伝統であるCHAmmiTがこれからも実りあるものになるよう、来年度のスタッフにはこれらの反省を活かしつつ、その年にあったやり方を模索し、更に良いものにしてほしい。日本大学の教育が発展し、学生も教職員の方たちも有意義な大学生活を送れることを心から願っている。

「CHAmmiT 本番までを振り返って」 宮口昌也

(日本大学生物資源科学部森林資源科学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ インフルエンサー)

初めに「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」開催にあたり、ご協力いただいた学生、教職員の皆様に御礼を申し上げる。2013年度より開催されている日本大学 学生FD CHAmmiTの歴史の中で、初の対面とオンラインのハイブリッド開催となった今年度を無事に乗り越えられたのは、関わっていただいた皆様のご尽力あってのものだと考える。

私が大学一年次には新型コロナウイルスの蔓延によって、ほぼ全ての授業がオンデマンド形式での実施となり、学生同士での交流機会の喪失はもちろんのこと、学内施設の利用ができず、自らの学びを深める機会をも奪われかけていた。そんな中で、学生自身が受ける教育の質やその改善について議論し合う日本大学 学生FD CHAmmiTの存在を知り、コロナ禍といった不可抗力とはいえ本来の大学の姿からかけ離れた、不満が募る大学教育の現状に、一石を投じたいという思いから前年度の日本大学 学生FD CHAmmiTに学生スタッフとして参加した。本年度では、前年度にファシリテーターとして参加した経験から、本活動を主

導する立場で進めたいと思うようになり、コアスタッフとして本年度の活動に、約半年間という短い間ではあるが、関わらせていただいた。

主にインフルエンサーとして、本活動の広報担当のようなかたちで Instagram や Twitter などにスタッフミーティングの様子をはじめとした活動内容の発信を行い、本活動の認知度向上に取り組んできた。結果から申し上げると、どちらの SNS もフォロワー数に大きな変化は見られなかったが、投稿内容としては満足いくものが半年間を通して発信することができ、やりとげられたと思う。また、本年度のチームインフルエンサーでは活動内容の発信に加え、視認性の高いグリッド投稿の活用や、16 学部 87 学科、短期大学部 4 学科、通信教育部 4 学部の特色を発信するための学科紹介企画を行い、インフルエンサー内で自身の所属する学科の特色を 1 日おきに Instagram に投稿した。インフルエンサーとしては実りある活動になったのではないかと考えている。

次に、本番を迎えるまでの自身の活動について振り返ろうと思う。前年度と異なり、スタッフミーティングが日本大学本部で行うことが可能となり、スタッフ同士が対面でコミュニケーションを取ることが容易になったにもかかわらず、スタッフミーティングの日程が大学の集中講義と被ったり、新型コロナウイルスの濃厚接触者となってしまったりで、なかなか参加することが出来なかった。せっかくの対面実施に積極的に関わることが出来なかったことは、本活動を主導で運営する立場にあるコアスタッフとして反省すべき点である。夏以降は徐々に活動に参加することができ、スタッフミーティングや、学生スタッフを対象としたファシリテーション練習会等で多くのスタッフとコミュニケーションをとり、本番に向けてスタッフ一丸となって取り組めたと思う。

本番では、同じくコアスタッフであった曾山さんと 2 人で司会進行の役割を担った。オープニングが始まる前の注意事項の説明を自分が担当した。多くの参加者にとって、スタッフから発せられる第一声が自分の説明であることから、とても緊張したが、これから始まる日本大学 学生 FD CHAmmit でのさまざまな議論を楽しんで欲しいという思いから、自信を持って喋るように努めた。実際にオープニングが始まってからエンディングが終わるまでは、前日に行ったりハーサルの通りにトラブルなくスムーズに進めることができ、司会進行として役割を果たせたように思う。

前日のリハーサルから、司会台本のスライド化や Zoom 背景、カメラ、グリーンバックの調整等、2 人が司会進行を務めるにあたって多くのご協力をいただいた本部学務課の緑川さん、日本大学 FD 推進センター全学 FD 委員会プログラム WG リーダーの平山先生にこの場を借りて改めて御礼申し上げる。また、ファシリテーターを務める予定だった学生スタッフが当日欠席したため、急遽自身もファシリテーターとしてセッション 1, 2, 3 に参加することとなり、司会進行もあってかなり慌ただしい本番となった。数多くの参加者に対して学生スタッフが不足する事態に見舞われたので、来年度の活動ではより多くのスタッフ確保が重要になると考えられる。終わりになるが、コアスタッフとして、インフルエンサーとして、当日の司会進行・ファシリテーターとして、もっと主体的に取り組めたら良かったという一抹の後悔は残るものの、結果としては成功に終わったのではないかと考える。

本年度の活動において、参加者に対する十分なスタッフ数の確保や、短期間でのファシリテーション技術の習得など、来年度の活動において十分に検討すべき課題点は多く見つかったので、ぜひ来年度の活動に活かして欲しいと願う。約半年間の活動の中で、周りの支えがなければここまで来れなかったと強く思う。この場を借りて、今までの活動において近くで支えてくれたコアスタッフの皆にも御礼を申し上げる。

「CHAmmiT に参画する意義」 垂見麻衣

(日本大学通信教育部商学部商業学科2年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ セクレタリー兼アート)

昨年引き続き CHAmmiT にコアスタッフとして参画した最大の理由は、日本大学の通信教育部をはじめとした全学的な大学の教育改善活動を進めることができることを昨年度の活動を通して実感し、今年度もさらにそれを推進したいと思ったからである。CHAmmiT に参画することは、日本大学の現状を客観的に分析し、良い点・悪い点を再確認したうえで、それらに真摯に向き合うことは、より良い日本大学、より良い学生生活の実現に近づく最良の手段であると言えよう。

今年度の CHAmmiT は、対面・オンライン (Zoom) を用いたハイブリッド形式で開催された。このハイブリッド形式は、参加者に対してコロナ禍における適切な「選択肢」を与え、共に課題に取り組む機会を広く提供することから、昨年よりも多くの参加者と共に改善活動に取り組むことができたと考える。

コアスタッフとして運営側に携わってみて感じることは、昨年同様、コアスタッフは学生スタッフをうまく巻き込みながら参加者の関心度をより向上させ、CHAmmiT 全体をマネジメントできたように感じる。しかし、昨年の改善点として挙げていた「より円滑な議論のための早期準備」については、今年度も手付かずとなってしまう、継続課題として残ったと言わざるを得ない。

私個人としては、今年度の本番当日は、通信教育部のファシリテーションを務め、多くの学生や教職員の生の声を聞き、ファシリテーションする中で、自分自身が抱えていた不安や疑問は、同じ通信教育部の学生・教職員たちの共通の不安・疑問であることを認識することができた。この点は大きな収穫だった。コロナ禍において、多くの科目がオンライン環境での授業実施を継続する中で、今後対面授業に戻すのか、このままオンライン授業を継続するのか、学生・教職員の2つの側面からの授業の理想像がかいま見えたように感じ、非常に貴重な機会となった。

今年度の CHAmmiT をきっかけに、通信教育部の中でも、小さいながらも、具体的なアクションが動き始めたことは非常に喜ばしく、引き続き CHAmmiT の魅力を発信しながら、学生FDの更なる活性化、そして日本大学の発展のためにもっと行動していきたいと思う。